

論文

慶長5年10月20日の江上合戦についての立花宗茂発給の感状と軍忠一見状（合戦手負注文）に関する考察（その2）

白 峰 旬

【要 旨】

合戦の際に出される感状や合戦手負注文についての研究史としては、中世から戦国期に関する事例研究は豊富であるが、近世における事例研究はいまだ未開拓の分野であるといえよう。よって、本稿では近世（慶長5年）の事例研究として、慶長5年（1600）10月20日の江上合戦についての立花宗茂発給の感状と軍忠一見状（合戦手負注文）に関して考察をおこなう。

【キーワード】

江上合戦、立花宗茂、感状、軍忠一見状、合戦手負注文

※拙稿「慶長5年10月20日の江上合戦についての立花宗茂発給の感状と軍忠一見状（合戦手負注文）に関する考察（その1）」（『別府大学大学院紀要』19号、別府大学、2017年）より続く。

3. 実戦の具体的状況について

江上合戦の実戦記録として、立花勢の中核として戦った小野和泉守（鎮幸）（以下、小野和泉と略称する）のほか、立花勢の立花吉左衛門（成家）・十時源兵衛が後日申し上げた「覚」がある⁽⁵⁵⁾、その内容を筆者（白峰）が以下に現代語訳して（以下、龍造寺家・鍋島家の軍勢については敵と略称する）、この合戦の戦闘状況を復元する⁽⁵⁶⁾。

①「小野和泉が申し上げた覚」

【10月19日の申の刻（午後4時頃）～日が暮れるまで】

▼10月19日の申の刻（午後4時頃）に江上へ出て、敵の様子を詳しく見届けた。（敵の）勢（＝兵力）は1万少し余りと見えた。

▼（先手の）安東五郎右衛門・（先手の）千手六之丞（六之允カ）の両人が、（日が）暮れない先に（日が暮れる前に、という意味か？）「ひとせり合」（＝一度戦う、という意味であろう。⁽⁵⁷⁾）すべき旨を述べて、足軽を出したが、敵は出てこなかった。

▼（先手の安東）五郎右衛門は、敵の備より一町（約109m）の内まで出撃して、鉄炮4～5挺で撃たせたので、敵はことのほか騒いだのを見て攻め寄せたが、（先手の安東五郎右衛門の備との間に？）堀があったので、（私〔小野和泉〕は）力なく控えていた。

▼そのようにしているうちに日が暮れたので、私(小野和泉)の方より人をもって引き取る旨を申し聞かせたので(先手の安東五郎右衛門は)撤退した。

【コメント】

江上合戦の前日にあたる10月19日の夕方には、小野和泉が敵状の視察(直接目視)をして敵の兵力数の見積りをした。安東五郎右衛門と千手六之丞(六之允カ)が先手であったことは後述されている。先手の安東五郎右衛門の備との間に(?)堀があったので小野和泉は戦わずに控えていたということから、小野和泉の備は先手の安東五郎右衛門の備より後方にあったことがわかる。よって、小野和泉は先手ではなかったことがわかる。日が暮れたら戦わず撤退したことがわかる(夜は戦わないというセオリーか?)。小野和泉は先手の安東五郎右衛門に対して撤退の指示を出しているの
で小野和泉は実質的な司令塔の役割を果たしていたと考えられる。

【10月19日の夜】

▼その夜、(先手の)千手六允(六之允カ)が言うには、「思ったより敵の勢(=兵力)は、ことのほか大勢である」と述べた。

▼新田平右衛門・立花弾正(鎮実)の両人が言うには、「(立花)道雪(公)の御代より、この方は肥前衆(=龍造寺・鍋島勢)との戦いには、敵が大勢であることは、今に始まったことではない。筑前にては細野原、筑後にては下妻・福嶋、または、高良山そのほか、所々の小競り合いにも、味方の勢(=兵力)に(対して)敵の勢(=兵力)は十倍しないことはなかったが、八幡(神)も照覧(され)、一度も不覚を取ったことはなかった。この度も、そうであろう」と述べた。

▼私(=小野和泉)が言うには「大村善長(=大村喜前のことか?)は加藤清正殿へ御使者を遣わした、と聞いた。この知らせ次第、または関東(=家康のことか?)の首尾次第で(=何らかの文脱カ)、明日(=10月20日)にても一戦を遂げるならば、まさかし損じないだろう」と雑談をした。その座にいた者共は、いずれもその通りに思った。

【コメント】

江上合戦の前日にあたる10月19日の夜は、立花勢において、敵の兵力数について討議した。これは軍議のようなものであったのかもしれないが、全体的に状況を楽観視している。ここで発言した新田平右衛門と立花弾正は、翌日の合戦(江上合戦)で討死した(この2人の討死については後述する)。

【10月20日】

▼そうしたところ、明るる(10月)20日の日の出(の頃)に、夥しい鉄炮の音を聞いたと、備に差し出した者共が走り帰り、「ただ今、(先手の)安東五郎右衛門・(先手の)石松安兵衛・(先手の)千手六之允の3人が鐘を合わせた」と述べたので、(小野和泉が)備を押し出したところ、敵2000~3000が備を乱して崩れたように見えた。

▼これは（先手の石松）安兵衛・（先手の安東）五郎右衛門が^(ママ)三手（二手カ）にて、（敵を）追い崩した、とのことであった。

【コメント】

夥しい鉄炮の音を聞いたということは、日の出の時間帯に先手どうしの鉄炮の撃ち合いがあったと考えられる。先手の安東五郎右衛門・石松安兵衛・千手六之允の3人（この3人が先手であったことは後述されている）が戦いを開始してから、小野和泉が備を押し出したことがわかる。よって、小野和泉は先手の後方に備があったことになるので、小野和泉は^{なかぞなえ}中備ということになる。先手の安東五郎右衛門と石松安兵衛が敵を追い崩したので、敵2000～3000が備を乱して崩れたことを小野和泉は目視で確認し、その敵の数も目視で確認している。

▼その（日の）朝は、霧が深く敵・味方の（先手の戦いの）^{ありさま}有様がはっきりと見えなかった。そのうえ、（小野和泉と味方の先手との間が）4～5町（約436～545m）ばかり隔たっていたので、（先手の戦いの様子が）なおさら見えなかった。

【コメント】

天候条件が霧の場合、敵・味方の先手の戦いの様子が中備の小野和泉には目視ではよくわからなかったことがわかる。江上分戦がおこなわれた慶長5年10月20日は、太陽暦（グレゴリオ暦）では1600年11月25日にあたるので、江上合戦当日の朝に霧が深かったことは、晩秋の時期と関係していたのかもしれない。

▼とにかく（味方の）先手を（敵に）討たせてはどうしようもないと思い、（小野和泉が）攻め寄せたところ、（先手の安東）五郎右衛門の与力の沓懸藤左衛門・（先手の石松）安兵衛の与力の小串藤五郎は、右の2人（先手の安東五郎右衛門と石松安兵衛）は深手を負ったが、攻めながら（敵の頸を）分捕1つずつをして、（石松）安兵衛と（安東）五郎右衛門は2人共に討死した、とのことで、（沓懸藤左衛門と小串藤五郎が）石松（安兵衛）と安東（五郎右衛門）の2人の首を差し上げて持ってきた。

▼鎧（＝戦闘⁽⁵⁸⁾）の様子は（どうだったのか）と（小野和泉が）尋ねると、「（先手の）千手六之允が引いた（＝撤退した）ので、崩れた敵が立て直し、2人（先手の安東五郎右衛門と石松安兵衛）共に討死をした、とのことである」と述べた。このように行く行く（＝行きながら）聞いた。

【コメント】

先手の石松安兵衛と安東五郎右衛門の2人は討死をした。その原因は、もう1人の先手である千手六之允が撤退した（撤退した理由は不明）ので、崩れた敵が立て直して先手の石松安兵衛と安東五郎右衛門の2人は討死をしたのである。このように、先手の石松安兵衛と安東五郎右衛門の2人の討死により、先手の石松安兵衛と安東五郎右衛門の2人の備は崩壊した、と考えられる。そうになると、次に敵は先手のあとに位置していた小野和泉に攻めかかってくると思われる。

▼敵が3000ばかり（小野和泉に）かかってきたところに、私（小野和泉）の備より左の方に3町（約327m）ばかり先立って、立花三太夫（統次）が（敵と）鎧を合わせて、敵の三備を切り崩した、とのことがのちに知れた。私（小野和泉）の手（＝軍勢）は、（敵と）鎧を合わせていたので、脇のことは知らなかった。

【コメント】

白兵戦の混乱した状況の中では、約300m左方の戦況（戦闘状況）もよく把握できなかったことがわかる。先手の石松安兵衛と安東五郎右衛門の2人の備が崩壊したため、敵はその後方に位置していた小野和泉に3000で攻めかかってきた。小野和泉の備の左方に3町（約327m）ばかり先立って立花三太夫が戦っていた。立花三太夫は敵の三備を切り崩したことがあとでわかった。立花三太夫はのちに討死した。小野和泉の備の左方に立花三太夫がいたということは、立花三太夫も中備だったということになる。

▼（先手の石松）安兵衛と（先手の安東）五郎右衛門が討死をした時、敵が脇にまわったと見えて、（敵は）右の方より横矢（＝側面から矢を射ること）を多く（味方に対して）討ち掛け（射掛け、の誤記か？）てきた。このため、味方は大勢（＝多人数）が損じた（死傷した、という意味か？）。鎧合わせをすると（言って）一度に跡備の立花弾正も押し出で敵の四備立を足もなく（苦もなく、の誤記か？）追い崩した。

【コメント】

敵が横矢を多く射掛けてきて、味方が大損害を出した（大勢死傷した、という意味か？）ということは、白兵戦の最中に、敵は立花勢の側面にまわり弓矢を集団運用したことを示す。つまり、白兵戦の最中に、敵は兵科別編成の弓足軽の組（部隊）を集団運用し、その効果（戦果）が大きかったと考えられる。このことは、白兵戦の最中に、敵は飛道具である弓矢を集団運用して大きな戦果をあげたことをも示している。

▼（しかし）立花三太夫が討死したので、敵はこれに色を直して（盛り返して、という意味か？）取って返した。私（小野和泉）の手の者共は、（上述のように）はじめの横矢により大勢を損じたので、その時は働き兼ねた。

▼そのうえ、私（小野和泉）は手負いだったので、下知ができず難儀していたところに、（立花）弾正親子は横鎧（敵の側面から鎧で突きかかること）にかかり、敵を3町（約327m）程追い崩した。

【コメント】

先手の石松安兵衛と安東五郎右衛門の備が崩壊したため、敵は中備の小野和泉などの備の横にまわって攻めかかってきた。そして横から横矢を射たので味方は大勢損じた（死傷した、という意味か？）。これは、敵が単に横にまわって兵科別編成の弓足軽の組（部隊）により側面攻撃をしただけでなく、先手の備が崩壊して立花勢が減ったので敵の軍勢が多いことを活かして包圍殲滅しようとしたのであろう。跡備の立花弾正が押し出してきて戦ったのは、この時点で跡備まで投入せざる

慶長5年10月20日の江上合戦についての立花宗茂発給の感状と軍忠一見状（合戦手負注文）に関する考察（その2）（白峰）を得ない戦況（戦闘状況）になったと考えられる。とすると、戦いは立花勢の惨敗が必至で、この時点で最終段階に入ったのであろう。後述のように、立花弾正の父子はのちに討死した。

この時点で、最も中核の戦力である小野和泉が下知ができない程負傷していたことは、立花勢の大敗北が濃厚になっていたこと示している。立花弾正親子が敵に横鏑でかかったことは、敵だけでなく立花勢でも側面攻撃をしたことがわかる。そして、この横鏑により敵を3町（約327m）程追い崩したということは、（当時の軍勢は）側面攻撃に弱かったことを示している。この点は、上述のように、小野和泉の軍勢が敵の横矢によって大損害を出したことからわかる。

▼矢嶋左助（重成）も跡備であり、（立花）弾正と一所にいたが、どのように思ったのか（戦わずに？）控えていた。新田平右衛門も（矢嶋）左助と一所にいたが、（立花）弾正の手の者共が敵に跡を取り切られる（＝背後を遮断される）のを見て、（新田）平右衛門は「ひたすらに（敵に）かかれ」と切々と（矢嶋）左助に言ったが、（矢嶋）左助は若気で無功者（功のない者＝実戦での武功がない者という意味か？）だったので（敵に）かからなかった。

【コメント】

跡備の矢嶋左助は戦わずに控えていた。このことは、矢嶋左助が、敵に跡を取り切られる（背後を遮断される）立花弾正（跡備）の手の者共を救援しなかったことを意味する。背後を遮断するとは敵が包囲して殲滅しようとしていることを意味すると考えられ、当時の戦いにおいて、背後を遮断する戦術があった点に注意したい。新田平右衛門が矢嶋左助に対して、「ひたすらに（敵に）かかれ」と切々と言ったことは、戦場では口頭で指示を出したことを示している。

▼私（小野和泉）の手の者共は、或いは討たれ、或いは手負いをして、わずか14～15人になったので、鏑場（＝戦場⁽⁵⁹⁾）を退くばかりで、（立花）弾正を助勢することができず、無念ながら（立花）弾正親子を（敵に）討たせてしまった。この時、（矢嶋）左助が（敵に）かかっていたら、鏑（＝戦闘⁽⁶⁰⁾）は味方の勝利になったはずである。その理由は、（この時）12備の敵勢（のうち）9備まで打ち崩して（おり）、（立花）弾正の跡に味方の勢（＝兵力）が50～60人続けば、残る敵の3備は何より（た）やすく追い崩すことができたはずだからである。

【コメント】

小野和泉の軍勢がわずか14～15人になったということは立花勢の大敗北を如実に示している。こうして小野和泉が立花弾正を助勢できずに討死させてしまった。この時、矢嶋左助が敵にかかっていたら味方が勝利したはずである、と小野和泉が述べているのは、立花弾正に矢嶋左助が後続すれば、敵に背後を遮断されず、立花弾正が討死することもなかった、という意味であろう。つまり、敵の備を追い崩すためには後続の兵力（50～60人）が必要であったということがわかる。小野和泉が50～60人という具体的数字を提示している点は興味深い（50～60人を人数的に多いと見るのか、少ないと見るのかは検討の余地があるが）。逆に言えば、敵は攻撃対象の後続兵力が続かないように、それぞれの備の背後を遮断する作戦（つまり、攻撃対象の備と備をバラバラにして連携させないようにする作戦）だったことがわかる。

▼新田平右衛門は(矢嶋)左助を制し兼ね、1人駆けて来て、私(小野和泉)の備より30間(約54.5m)ばかり先にて、(敵の)矢にあたり死んだ。(そして)敵3人が(新田)平右衛門の首を取るため駆け寄ったのを、(新田)平右衛門の「内の者」の(実)藤甚兵衛という者が鎧を取り、3人の敵(のうち)1人を倒し取り、(新田)平右衛門の死骸を無事に取った。

【コメント】

新田平右衛門が敵の矢にあたり死んだことは、白兵戦の最中に敵は飛道具である弓矢を使用したことを示している。

新田平右衛門が戦死したあとの状況は、戦場で1人(新田平右衛門)が討死すると、敵3人が駆け寄ってその首を取ろうとしたことがわかる。戦場での首取りのすさまじい実態がよくわかる。新田平右衛門の麾下の者にとって、敵に平右衛門の首を取られることは恥であったと思われる。そのため、討死で単に終わるのではなく、討死後も味方の首を敵に取られないための戦いがさらにあったことがわかる。

▼私(小野和泉)のことも、今は早くも討死と思い定め、向かってくる者をおがみ打ち⁽⁶¹⁾にして、横からきた敵を払い切り、21～22人程も切り伏せた。

▼しかし、敵が大勢取り掛かり、「和泉を討ち取れ」と十方より声々にわめき、鎧・長刀にて取り囲み、すでに討死しようとしていたところ、私(小野和泉)の与力である丹波左馬、帆足日向、中野大膳、大庭太郎右衛門の4人が真っ先に駆けふさがり、無二無三に(=脇目もふらず) (敵と)鎧を合わせて、比類のない働きをした。

【コメント】

小野和泉が敵に取り囲まれた状況がよくわかる。敵が「和泉を討ち取れ」と十方より声々にわめいた、ということは、戦場において敵が小野和泉本人と認識していたことを示している。これは小野和泉の甲冑・装束・旗指物などの外見から判断できたのだろうか。或いは、小野和泉が馬に乗っていたとすれば、そのことから判断できたのだろうか。小野和泉の与力4人が敵の包囲の中から鎧を使って小野和泉を救出したことは、与力の本来の役割を示しているといえよう。

▼しかし、敵は大勢だったので少しもひるまなかつたところ、私(小野和泉)の家来で、内々に四天王とわかりやすく諸人が言っている(家来で)、そのうち、大原市内が私(小野和泉)に言うには、「とても(敵は)大勢であり、私(小野和泉)が討死しないと、敵はひるまはずである。かねて申し置いたように、いかなる時節でも主君(=小野和泉)の一命にかわりたいと朝夕申し述べてきた。そのうえ、(そのことを)仏神にも祈誓を掛け、多年心にかかり、願っていたところに、ただ今、神慮にかなったことは誠にもって本望である。ひたすら私が(小野和泉から)鎧の着替え、乗替えを申し受け、(小野)和泉と名乗り、大勢の(敵の)中にて討死すれば、少しは敵もひるむだろう。(よってこのことを)是非に申し受けたい。」と涙を流して望んだので、あまりに不憫に思って、鎧・馬⁽⁶²⁾を取らせた。

▼（そして）右の鎧を着て、馬に乗って下人⁽⁶³⁾14～15騎（の騎馬）を前後に引き連れ、一文字に駆け込み、「小野和泉最期の軍^{いくさ}」と名乗り、よく敵5～6人に鎧を合わせ、ついに討死した。しかし、敵は崩れる様子が見えなかったところ、どうしたことか、思いのほか（敵が）崩れ立ったので、私（小野和泉）は不思議に一命を持ち、（自分の居城がある）蒲池まで引き取った。

【コメント】

この史料中、この箇所では馬の記載が初めて出てくる。小野和泉の身代わりになった大原市内が、馬に乗って家来14～15騎の騎馬を前後に引き連れた、ということは、当時、小野和泉が戦場においてどのような形（騎乗して自分の馬の前後に麾下の士〔騎馬〕を14～15騎引き連れる）で戦ったのかがよくわかる。この史料中、馬の記載があるのは、この2箇所のみである。ということは、この戦いにおいて立花勢では馬の使用は限定的だった、ということになる。

▼（小野和泉は）この年まで67ヶ所の疵を受けたが、この度は、左の乳の下を二ツ玉⁽⁶⁴⁾にて撃ち抜かれ、そのうえ、すねも撃ち通されたので、（自分の居城がある）蒲池まで引き取る間に、眼がくらんだことが3度だった。しかし、（自分の）与力・家来に力を付けられ、（自分の居城がある）蒲池まで引き取った。最早、助からないだろうと思い、（自分の）与力・家来を打ち寄せ、とにかく今夜は夜も過ごせない覚悟をして、最期の届けと思い、「わく」（霊屋という意味か？）という物に入り、最期を待っていた。

▼その時、加藤清正（「清正公」）より（小野和泉に対して）御書（＝書状）を下され、（その書状には）「私（小野和泉）のことは、江上表において討死した、との旨がうわさされている。また、大変な疵を負い、（自分の居城がある）蒲池にいる、とも（加藤清正が）聞かれたので、そのことについて事実なのか事実でないのか、ということ（加藤清正が）聞きたい」とのことであると、大庭太郎右衛門が大声にて三回（小野和泉に）読んで聞かせた。

▼（そこで加藤清正への）返答（の書状）をするについて、少し思う子細があったので、端書・判形は自筆にする旨を（小野和泉が）述べたが、あまりに難儀に見え、段々と様子が悪くなり、そのうえ、深手だったので、前後の見分ができないので、与力・家来が是非に無用（と言い）、（小野和泉が）筆（をとることは）とてもかなわないだろう、（と言った）。そのうえ、「しやうね」（＝正気という意味か？）も乱れ、（小野和泉は）最期（＝死ぬ時）を待つ程だったので、筆を取ることは思いも寄らないことだと、しきりに止めたが、（小野和泉は）無理に筆を取り、少しの端書を3度にして判形をした時、眼がくらんだので5度にて判形を終えて、返答（の書状）を申し上げたので、その後、（加藤）清正より良い外科（の医者）を付けられたため、このように本復（＝全快）した。

【コメント】

小野和泉のこれまでの戦歴において、すさまじい負傷体験がよくわかる。今回の負傷でも鉄炮の玉が2ヶ所（左の乳の下とすね）も貫通しているので本来なら即死であろうが、それにしてもすご

い精神力としか言えない。

▼その後、どのようなことで、(先手の安東) 五郎右衛門と (先手の石松) 安兵衛は、(味方の) いずれもへ知らせずに (敵に) かかっていったのか、と吟味したが、私 (小野和泉) の与力の松隈小源が (10月) 19日の夜にいずれも寄り合い、敵の批判をしていたのを物越しに聞いて、「さては敵はいずれより、(た) やすく打ち破ること (ができる) ぞ」と思い、(松隈小源は) 偽って私 (小野和泉) に (のヵ) 使者になり、(先手の安東) 五郎右衛門、(先手の石松) 安兵衛、(先手の千手) 六之允方へ行き、「先手にありながら、なにゆえに油断して (敵に) かからないのか、かかり難いのであれば、跡備に替えられよ」と述べたので、彼等は腹を立てて、無二無三に (敵に) かかり、右の通りになった。それならば、松隈 (小源) は討死をもすべきところ、安穩に逃れ、今にいるので、言語道断の次第である。

【コメント】

この記載からは、先手と跡備という区分がわかる。先手の安東五郎右衛門と石松安兵衛は、本来、味方へ連絡してから敵にかかることになっていた、ということなのであろう。味方へ連絡せずに敵にかかっていったということは抜け駆けの扱いになったのであろうか。そのため、小野和泉はその経緯を後日調べたのであろう。

▼最後に敵を崩したのは、立花吉左衛門が駆け付けたためである。「その朝 (=10月20日の朝か?)、遣わされた矢嶋左助を召し置き、立花兵庫、堀七郎兵衛など、このように若者ながら場を踏んだ者を遣わされたならば、鏖 (=戦闘⁶⁵) には何より (た) やすく勝ったはずである」と (小野和泉は立花宗茂に) 申し上げた。殿様 (=立花宗茂) は御機嫌が一段とよく、松隈 (小源) のことは笑われたので、(小野) 和泉もその分にて構いなく、肥後に召し置いている。前に (立花) 弾正とあるのは、右衛門太輔のこと (である)。

【コメント】

立花吉左衛門が最後に江上へ駆け付けたことは、次掲の②「立花吉左衛門が申し上げた覚」にも記されている。矢嶋左助のような無功者 (功のない者 = 実戦での武功がない者という意味か? 矢嶋左助が無功者である点については上述した) を召し置き、立花兵庫、堀七郎兵衛のような若者ながら場を踏んだ者を戦場に遣わすべきだった、という小野和泉の指摘は重要である。実戦ではそれまで場数を踏み、武功がある者こそ役に立って勝利につながる、ということであろう。実際、上述のように、矢嶋左助は新田平右衛門に「ひらにかかられ」と切々と言われたが、敵にからなかった。小野和泉は、上述のように、この点について「若気で無功者 (= 功のない者) だった」から、としている。このことは、矢嶋左助が年若く、これまで戦場での武功がなかった、という意味であろう。そして、上述のように、小野和泉は、この時12備の敵勢のうち9備まで討ち崩しており、立花弾正の跡に味方の勢 (= 兵力) が50~60人続けば、残る敵の3備は何より (た) やすく追い崩すことができたはずである、とも言っているが、これは跡備の矢嶋左助が続かなかったことを指しているのであろう。矢嶋左助は跡備であったから、矢嶋左助を跡備にするのではなく、立花兵庫、堀七郎

兵衛を跡備にすべきだった、という意味であろう。

②「立花吉左衛門が申し上げた覚」

【10月19日朝～同日中】

▼（10月）19日の朝、榎木津村の脇にて、足軽の「せり合」（＝接近したいくさ⁽⁶⁶⁾）があったが、（立花吉左衛門は）少しも子細（＝差し支え）なく敵を追い崩し、雑兵27人を討ち取った。

【コメント】

榎木津村は江上とは別の地点である。そこで足軽の「せり合」（＝接近したいくさ⁽⁶⁷⁾）があり、立花吉左衛門の軍勢は敵の雑兵27人を討ち取ったことがわかる。

▼その後、（立花宗茂の）御意によって、（立花吉左衛門は）水田口へ（黒田）如水の押えに向かった。私（立花吉左衛門）の一手の3分の1（「三ヶ一」）は城番（立花吉左衛門の居城である城嶋城の城番か？）にとどめ置いた。早晩（＝いずれ）より（味方〔立花吉左衛門〕は）無勢（ぶぜい＝軍勢が少ないこと）ではあったが、黒田殿の家中衆も高麗（＝朝鮮出兵）以来、その手ぶりは見慣れていたので、（黒田如水の軍勢は）大勢ではあったが、鎗（＝戦闘⁽⁶⁸⁾）には勝つだろうと思っていた。

▼私（立花吉左衛門）の陣場へ小野和泉方より、「見へ隠」（意味不詳）に足軽2～3人を付け置いた。これはきっと、私（立花吉左衛門）の手が心元ないと思って、（足軽2～3人を）付け置いたのだと思い、私（立花吉左衛門）も「自然之事」（もしものこと、という意味か？）（があるかもしれない）と思い、被官2人を江上へ遣わして、（小野）和泉の手のことを見せ（て）置いた。敵（黒田如水）より（こちらへ）取り掛からないならば、この方より軽率に仕掛けてはいけない、と（立花宗茂から）命じられていたので、その分にて、「せり合」（＝接近したいくさ⁽⁶⁹⁾）もしなかった。

【コメント】

立花吉左衛門は立花宗茂の命によって、黒田如水の押えのために水田口へ移動した。立花吉左衛門の一手（軍勢）の3分の1は城番（自分の居城である城嶋城の城番か？）に置いた。このことから戦いの際の城番の人数の目安がわかる。水田口では、当初から味方（立花吉左衛門の軍勢）は軍勢が少なく、黒田如水の軍勢は大勢であることがわかっていて、黒田如水の軍勢に対して、立花吉左衛門の方から戦いを仕掛けてはいけないというように立花宗茂から命じられていたので、「せり合」（＝接近したいくさ⁽⁷⁰⁾）はなかった。この点については、立花吉左衛門の軍勢が、黒田如水の軍勢が江上へ向かわないように、黒田如水の軍勢と直接対戦せず、単に対峙することに意味があった、ということなのであろう。朝鮮出兵以来、黒田如水の「手ぶり」は見慣れていたので、黒田如水の軍勢は大勢ではあったが、戦いには勝つだろうと立花吉左衛門が思っていた、ということは、立花吉左衛門は黒田如水の戦い方（戦術）をよく知っていた、という意味であろう。立花吉左衛門が被官2人を江上へ遣わしておいたのは、江上での戦況の変化を見届けるためであったと思われる。

【10月20日】

▼明くる(10月)20日、江上に付け置いた(立花吉左衛門の)被官が駆け来たって、「(江上で)「鏑」(=戦鬪⁷¹)があって(先手の)安東五郎右衛門、(先手の)石松安兵衛が討死しそうに見える」と言ったので、取り敢えず、急に江上へ行くと、鉄炮の音が夥しく聞こえたので、そのままに押し出した。

【コメント】

水田口から江上までは約5kmなので、立花吉左衛門とその軍勢は、その距離を移動したことになる。江上合戦で先手の安東五郎右衛門と石松安兵衛が討死しそうな段階で、立花吉左衛門の被官が帰ってきて立花吉左衛門の救援を求めたことからすると、江上合戦は、当初から敗北の気配があったのだろう。立花吉左衛門の被官が帰ってきて立花吉左衛門が江上に着いた時点で、鉄炮の音が夥しく聞こえた、というのは敵が撃った鉄炮であろう。とすれば、最初の段階の鉄炮戦とは別に、この段階(最終段階)で敵が敗北濃厚な味方に対して一方的に鉄炮を撃っていた、ということになる。

▼私(立花吉左衛門)の一手は日頃より無勢(ぶぜい=軍勢が少ないこと)であるうえに、道を急いでいたので、ようやく40人ばかりにて、江上村の北はずれより押し出したところ、味方は最早、「見へ隠レ」(=少数になった、という意味であろう)になり、敵は大勢で「しゝらふて」(意味不詳)押しかけてきた。(そこで)私(立花吉左衛門)の与力の阿部弥吉、寒田忠右衛門が一番に鏑を合わせ、しばらくためらっている(待っている、という意味か?)間に、私(立花吉左衛門)の手の者共が、あとより5人、6人ずつ追々に来たのを敵が見て崩れたので、5町程(約545m)追い討ちをした。これにより、この方の備が乱れたので、早々に勢(=兵力)を鎮めて引き取った。

【コメント】

立花吉左衛門が江上に着いた時点では、40人くらいで押し出した。しかし、この時点では味方の敗北は濃厚で、敵は大勢で押しかけてきた。そこで立花吉左衛門の与力の阿部弥吉、寒田忠右衛門が一番に鏑を合わせ、立花吉左衛門の手の者共が、あとより5人、6人ずつ追々に来たのを敵が見て崩れたので、5町(約545m)程追い討ちをした。このことからすると、立花吉左衛門の兵力数は40人のほかに5~6人ずつがあとから追い付いてきた、ということから多く見て100人程度であろうか。その程度の人数でも5町(約545m)程は敵に対して追い討ちができたことになる。敵に対して追い討ちをしたことにより、立花吉左衛門の備が乱れたので、早々に勢(=兵力)を鎮めて撤退した、ということは自分の備が乱れた時は、これ以上戦えないので撤収するのがセオリーだったのであるか。

立花吉左衛門の軍勢は、それまで水田口で黒田如水の軍勢と戦わずに対峙していたので、江上へ急いで移動したとしても、江上で戦いをする体力は残っていたのであろう。立花吉左衛門が江上へ駆け付けた段階で、味方は最早、「見へ隠レ」(=少数になった、という意味であろう)になり、敵は大勢で「しゝらふて」(意味不詳)押しかけてきた、としているので、この時点では、戦いは最

終段階であった、と考えられる。

▼私（立花吉左衛門）の手の者共は、（江上への）道を急ぎくたびれていなければ、鍋島殿の旗本をも追い崩すことができたのであり、それほど手応えのある敵ではなかった。右の通りであったので、私（立花吉左衛門）の手の人は、手負・討死はわずか14～15人であった。敵を30～40（人）討ち取った。今しばらく時早く（江上へ）駆け付けていたならば、いずれより（た）安く味方の勝利になるべき鏑（＝戦闘⁽⁷²⁾）であった、と申し上げた。

【コメント】

立花吉左衛門の軍勢は、江上への道を急ぎくたびれていても敵を30～40人討ち取ったので、くたびれていなければ、もっと戦えたはずである。立花吉左衛門の手の者の手負・討死はわずか14～15人であった、としているが、立花吉左衛門のこの時の軍勢の数（100人程度か？）からすると、ある程度の損害だったはずである。立花吉左衛門が、もう少し早く江上へ駆け付けていたならば、味方の勝利になるはずだった、としているが、上述の江上合戦での立花勢の敗北の仕方を考慮すると、立花吉左衛門の来援だけでは立花勢の勝利を決定付けることはできなかったであろう。

③「十時源兵衛が申し上げた覚」

【10月20日】

▼江上へ出て、戦いの様子を見届けよ、と（立花宗茂が）命じたので、急いで（江上へ）行ったところ、もはや（小野）和泉は深手を追い、20～30人にて引き返していた。私（十時源兵衛）が来たのを見て、（小野）和泉は、自分の勢（＝兵力）を皆、私（十時源兵衛）に添えて、自分（小野和泉）はわずか5～6人にて（自分の居城がある）蒲池をめざして撤退した。（小野和泉は）あとさき後先覚え難い（深）手を負っていたが、このようなところに気を付けることに、私（十時源兵衛）は全く驚いた。

【コメント】

立花宗茂の命により、十時源兵衛が江上へ来た時点では、小野和泉は深手を追い、20～30人にて引き返していた、ということなので、戦いの最後の段階で十時源兵衛が江上へ来たことになる。よって、十時源兵衛は戦力としてではなく、最後の見届け役として来たということになる。

▼（十時源兵衛が）鏑場（＝戦場⁽⁷³⁾）へ押し出したところ、立花吉左衛門は数多^{あまた}の分捕をして、40～50人ばかりにて引いてきた（＝撤退してきた）。私（十時源兵衛）が（立花）吉左衛門に言ったのは「引き返して、今「一鏑」（＝もう一度戦うという意味であろう）できないか」と言ったが、（立花）吉左衛門が言うには「水田より急いで来たので、弓・鉄炮の者が続いていない。その方も弓・鉄炮を（家臣に）持たせられていない。最早、敵は堀を隔てて備え、飛道具を隙間なく構えている。この方に弓・鉄炮はなく（敵に）かかって鏑を入れるのは難しい」と述べたので、（十時源兵衛も）尤もに思い撤退した。

【コメント】

立花吉左衛門の軍勢の人数を40～50人ばかり、としている点は、前掲の②「立花吉左衛門が申

「上げた覚」の記述 (40人くらい) とも一致するが、上述のように、あとから 5 人、6 人ずつ追々に来たとしているので、戦いにより一定の人数が減った結果、40～50人になったと考えるべきであろう。立花吉左衛門が数多の分捕をした、ということは、遅れてきたものの一定の戦果はあったということであろう。立花吉左衛門が「弓・鉄炮の者が続いていない」と言ったということは、「弓・鉄炮の者」 (=弓足軽、鉄砲足軽) として独立した弓足軽、鉄砲足軽の組 (部隊) (つまり、兵科別編成の部隊) が存在したことを意味する。また、この当時から「飛道具」 (弓・鉄炮) という言葉を使用していたことがわかる。「最早、敵は堀を隔てて備え、飛道具を隙間なく構えている。」ということは、敵はよほど豊富に飛道具 (弓・鉄炮) を持っていたのであろう。立花吉左衛門が「最早、敵は堀を隔てて備え、飛道具を隙間なく構えている。この方に弓・鉄炮はなく敵にかかって鏑を入れるのは難しい」と述べたということは、飛道具で重武装した敵に対して、飛道具 (弓・鉄炮) なしで攻撃をかけることはできない (=攻撃しても敵の飛道具 (弓・鉄炮) の犠牲になって討死するだけ)、と立花吉左衛門が認識していた、という意味であろう。この点は、備を率いる重臣クラスの部将が、敵に対して攻撃をかけるかどうかの軍事的判断 (戦況判断) の基準を知ることができる点で興味深い。

以上の記載全体を読んでわかったこととしては、次のことがいえよう。当時の合戦というのは、刻々と戦況が変わるので、前後の連携がとれないこともあり、前後左右の状況が的確に把握できない (自分も動いて戦っている) こともあった。立花勢におけるそれぞれの備の動き (戦い) は、それぞれの備を率いる重臣クラスの部将の個別の判断になってくるので、跡備の矢嶋左助のように敵にかかるべき時にかからなかったのも、そのことが立花勢の敗北につながった。そして、それぞれの備を率いる重臣クラスの部将のそうした戦況判断のミスが、立花勢の先手のケースのように、その備そのものの崩壊や、その備を率いる重臣クラスの部将の討死 (戦死) に直結したことがわかる (先手の安東五郎右衛門と石松安兵衛は、味方へ連絡せずに敵にかかっていき結果的に討死した)。その意味では、立花勢全体での統一した軍事指揮系統がなく、その点は近代戦との大きな違いであろう。

立花勢の戦闘状況を見ると、江上合戦は完全な立花勢の負け戦 (=完敗) ^{いくさ} だったのであり、そもそも敵との軍勢の数に圧倒的な差があったことは明らかであった (上記の史料をもとに、江上合戦における立花勢の布陣の概要図を図 1 としてまとめた)。

なお、前掲の①「小野和泉が申し上げた覚」で立花勢が 12 備の敵勢のうち 9 備まで討ち崩した、としている点について、中西豪氏は「立花側が龍造寺・鍋島勢の本陣と目した五反田は実は先手大将・茂里の本陣であり、龍造寺・鍋島勢で戦闘に加入したのは先手から第三陣までの兵力三〇〇〇前後に過ぎず、立花勢は約一三〇〇程度であった」⁽⁷⁴⁾ として疑義を呈していることは重要な指摘であり、今後も大いに留意されるべき論点である (この点については、中西豪氏の論考より引用した図 2、図 3 を参照されたい)。

4. 勝者側と敗者側の一次史料による認識の差異（記載の違い）

江上合戦について合戦後に、勝者側（龍造寺・鍋島勢）と敗者側（立花勢）のそれぞれがどのように文書（一次史料）に合戦の状況を記したのか、という点について検討する。

まず、勝者側の鍋島直茂は10月20日付で加藤清正の家臣である吉村橘左衛門尉に対して書状を出して、次のように報じている。

〔史料4〕⁽⁷⁵⁾

尚々小野和泉・矢嶋左介・三池傳（伊カ）兵衛、此者共大将にて罷出候由、生捕之者申候、
彼者共討果候哉、取押生捕度候、以上
預御札忝候、今日令御陣着候處、八郎院表へ敵二三千出合防戦候、得勝利、馬乗三百余討捕、
蒲池へ追籠、八郎院へ陣取候、八代表相澄、主計殿近日可為着陣之由、得其意候、猶期面拜候、
恐々謹言

鍋加守

十月廿日

直茂（花押）

吉村橘左衛門尉殿

御返報

この書状は江上合戦当日の10月20日付であるので、合戦終了直後に出されたことになる。この記載内容からは、①今日（10月20日）、鍋島直茂が着陣したところ、八郎院（八院の誤記か？）方面へ敵（＝立花勢）2000～3000人が出て来て防戦をした、②その結果、鍋島勢が勝利を得て敵の馬乗300余を討ち捕らえ、蒲池へ（敵を）追い込めて（＝蒲池まで敵を撤退させて）八郎院（八院の誤記か？）へ（勝利した龍造寺・鍋島勢が）陣取りをした、③生け捕った敵の者から聞いたところ、敵は小野和泉・矢嶋左介・三池傳（伊カ）兵衛が大将として出陣してきたとのことなので、これらの者共を（これから）討ち果たすか、取り押えて生け捕りたい、④八代方面（＝加藤清正による八代城攻撃のことを指す）が済み、加藤清正は近日（柳川方面へ）着陣する予定であることを了承した、などの点がわかる。

そして、（1）鍋島直茂が「勝利」を得た、と明記する一方、敵（＝立花勢）は「防戦」をした、と記されている点は注目され、敗北した立花勢にとっては当初から防戦としての性格が強かった、（2）小野和泉・矢嶋左介・三池傳（伊カ）兵衛が大将として出陣してきた、としているので、江上合戦に立花宗茂は出陣しなかったことがわかる、（3）加藤清正は江上合戦当日の10月20日の時点では柳川方面へはまだ着陣していなかった、（4）小野和泉・矢嶋左介・三池傳（伊カ）兵衛を（これから）討ち果たすか、取り押えて生け捕りたい、としていることは、鍋島直茂が10月20日の時点では、江上合戦のあとも立花勢との戦いを継続する考えであった、などのことが理解できる。

一方、敗者側の立花宗茂は10月27日付で島津義久・島津義弘・島津忠恒に対して書状を出して、次のように報じている。

〔史料5〕⁽⁷⁶⁾

近日者不申入候、通路不自由ニ付而申後候

- 一、前十四（「日」脱カ）、龍造寺国中之人数相催、久留米領分より河を渡候、豊前如水人数も罷出申談、羽藤四郎居城留守居之者共へ、人数をたてかけ、人質を取下城させ、同十五日、愚領中はし〜相動候、少之人数差出、得勝利候
- 一、大勢之儀ニ候間、此方少人数、手ひろく相拘候事不事（^(ママ)行カ）成、はし〜出城共、従此方引拂申候、然処に程近仕寄候、左候へハ、加藤主計方も宇土落去候へハ、則相動候、筑紫主水事加主同心候、有馬其外方々之衆、勿論如水何も被押寄候、籠城ニ罷成候事
- 一、餘程近押詰候間、人数を出、鍋嶋陣所へ仕懸候、數刻相戦、互勝負無之候、雖然敵大勢味方ハ無人故、手負戦死歴々ニ付而、居城きはまて諸勢押寄、詰陣候、然處、京都殘置候使罷下、先以御赦免之通被仰出候間、加主・如水へ理を申、和談ニ罷成候事

（後略）

十月廿七日

親成

龍伯様

惟新様

少將様

人々御中

この書状は10月27日付であるので、合戦の7日後に出されたことになる。この記載内容からは、①10月14日、龍造寺家⁽⁷⁷⁾が国中（肥前国）の軍勢を動員して⁽⁷⁸⁾、久留米領分（小早川秀包の領内）より（筑後川を）渡河し、豊前の黒田如水の軍勢も出陣して、（敵である龍造寺家と黒田如水の軍勢が）小早川秀包の居城（久留米城）の留守居の者共に対して軍勢をたてかけて（「たてかけ」は近寄せる、という意味か？）、（久留米城の留守居の者共から）人質を取って下城⁽⁷⁹⁾させた、②10月15日、（敵の軍勢が）立花宗茂の領内の郊外⁽⁸⁰⁾に出陣してきたので、立花宗茂は少しの軍勢を出して（戦い）勝利を得た、③しかし、（敵の軍勢は）大勢であるのに対して、立花宗茂の軍勢は少ないので、（領内を）手広く守ることができないため、端々の出城を引き払ったところ、（敵は）ほど近くまで仕寄せ⁽⁸¹⁾をしてきた、④加藤清正も（小西行長方）宇土城を落城させたので、この方（柳川方面）へ出陣してくると思われ、筑紫主水⁽⁸²⁾も清正に同心している、⑤有馬晴信⁽⁸³⁾そのほか方々の衆は勿論、黒田如水（の軍勢）も押し寄せてきたので、（立花宗茂は柳川城に）籠城することになった⁽⁸⁴⁾、⑥（立花宗茂が籠城している柳川城に対して）余程近くまで（敵が）攻めてきたので⁽⁸⁵⁾、（立花宗茂は）軍勢を出して、鍋島家の陣所へ（戦いを）仕掛けた、⑦そして数刻⁽⁸⁶⁾戦って互いに勝負は

慶長5年10月20日の江上合戦についての立花宗茂発給の感状と軍忠一見状（合戦手負注文）に関する考察（その2）（白峰）
つかなかつたが、敵（龍造寺・鍋島勢）は大勢であるのに対して味方（立花勢）は軍勢が少なかった
ので、（立花勢は）手負いや戦死が「歴々」（多い、という意味か？）であった、⑧（立花宗茂の）
居城（柳川城）の際まで、（敵の）諸勢が押し寄せて詰陣^{きわ}をしたところ、京都へ残して置いた使
者が下国して、（家康が）赦免（した）と言われたので、（そのことを）加藤清正、黒田如水へ知ら
せて和議になった、などの点がわかる。

上記⑥～⑧が江上合戦を指しているが（上記〔史料5〕では三ヶ条目にあたる）、この中で、立
花宗茂は、敵（龍造寺・鍋島勢）との圧倒的な兵力差があり、立花勢は手負いや戦死が多数出たこ
とは認めているものの、数刻戦って互いに勝負はつかなかつた（「數刻相戦、互勝負無之候」）とし
ている点は、明らかに事実をねじ曲げている、と言わざるを得ない。前掲の江上合戦の実戦記録
（①「小野和泉が申し上げた覚」、②「立花吉左衛門が申し上げた覚」、③「十時源兵衛が申し上げた覚」）
によれば、江上合戦は立花勢の大敗であったことは明らかであり、勝負がついたことは明白であ
つた。

敗者側である立花宗茂は江上合戦に大敗したことを認めたくなかつたのであろうが、勝敗の結果
については、勝者側の鍋島直茂の認識（上記〔史料4〕で「勝利」を得た、と明記している）の方
が、客観的に見て正しいことは明らかである。

このように一次史料であっても、内容的に正しいことが記されているのかどうか検証が必要であ
る、という点は注意すべきであろう。

おわりに

江上合戦について、前掲の①「小野和泉が申し上げた覚」では、最初の鉄炮戦以外はすべてすさ
まじい白兵戦であったことがよくわかる。兵科別編成の集団運用については、最初の鉄炮戦以外に、
白兵戦の最中に敵（龍造寺・鍋島勢）は側面から兵科別編成の弓足軽の組（部隊）を集団運用して
大きな戦果をあげた、と考えられる。このように、白兵戦の最中に、敵が飛道具である弓矢を集団
運用して大きな戦果をあげたことの意味は重要である。

前掲の③「十時源兵衛が申し上げた覚」では、立花吉左衛門の軍勢について、まだ「弓・鉄炮の
者」が江上に来ていない、としていることから「弓・鉄炮の者」（＝弓足軽、鉄砲足軽）として独
立した弓足軽、鉄砲足軽の組（部隊）（つまり、兵科別編成の部隊）が存在したことを示している。

このように敵味方ともに兵科別編成の部隊（敵は弓足軽の組〔部隊〕、味方の立花吉左衛門の軍
勢には弓足軽、鉄砲足軽の組〔部隊〕）が存在したと考えられるが、小野和泉など江上合戦で戦
った立花勢が敵の横矢により大損害を出したことを考慮すると、江上合戦で戦った立花勢（立花吉左
衛門の軍勢は除く）には、最初の鉄炮戦をおこなった鉄砲足軽の組（部隊）は存在したが、弓足軽
の組（部隊）は存在しなかつたという想定もできよう。

立花吉左衛門の軍勢の兵科別編成の部隊（弓足軽、鉄砲足軽の組〔部隊〕）の江上への到着が間

にあわなかったのは、装備や準備の関係で遅れたのかもしれないが、飛道具（弓・鉄炮）で重武装した敵に対しては、飛道具（弓・鉄炮）でしか対抗できない（白兵戦を挑むことができない）、ということを示しており、この点を考慮すると、飛道具（弓・鉄炮）VS 飛道具（弓・鉄炮）という戦いの構図が想起される。

とすれば、敵が飛道具で重武装する（飛道具を隙間なく構える）以前の段階では、すさまじい白兵戦が展開されたが、その白兵戦に決着が付き、敵が飛道具で重武装して完全な迎撃体制を整えると、もはや飛道具（弓・鉄炮）なしに白兵戦を挑むことができないという意味にとらえることができる。この点は、当時の合戦の戦闘状況の推移や飛道具（弓・鉄炮）使用の意味について検討するうえで、大きな示唆を与えている。

上述したように、表 7（軍忠一見状のうち、被疵の内訳が記されている 5 例に関して被疵の内訳をまとめたもの）における、被疵の内訳のそれぞれの合計を見ると、鉄炮疵 55.1%、鎗疵 20.2%、刀疵 10.1%、矢疵 14.6% であり、鉄炮疵の%が一番高く 50% 以上であり、一番%が低いのは刀疵であり、10.1% にすぎないことがわかる。表 7 のデータにおいて、鉄炮疵 55.1% と矢疵 14.6% を合計すると 69.7% になるので、飛道具による比率が高いということになり、このデータだけを見ると、江上合戦は飛道具（弓・鉄炮）主体の戦いであった、ということになる。

しかし、上述したように、前掲の江上合戦の実戦記録（①「小野和泉が申し上げた覚」）によれば、最初の鉄炮戦以外は、すさまじい白兵戦が展開されたことがよくわかる。

それでは、この違いをどのように考えればよいのだろうか。表 7 の被疵の内訳のそれぞれの合計において、鎗疵 20.2% は鉄炮疵 55.1% に次いで 2 番目に高い% なので、これは白兵戦が展開された証左となり、刀疵 10.1% よりも%が高いということは、白兵戦で刀よりも鎗の使用が多かったことを示している。では鉄炮疵の%が最も高い理由はどのように説明すべきなのか。前掲の②「立花吉左衛門が申し上げた覚」では、立花吉左衛門が江上へ駆け付けた時、鉄炮の音が夥しく聞こえた、としている点に注意したい。立花吉左衛門が江上へ駆け付けた段階では、味方は最早、「見へ隠レ」（＝少数になった、という意味であろう）になり、敵は大勢で「しゝらふて」（意味不詳）押しかけてきた、としているので、戦況の推移から考えると、戦いの最終段階であった、と考えられる。とすれば、最初の段階の鉄炮戦とは別に、この段階（最終段階）で敵が敗北濃厚な立花勢に対して一方的に鉄炮を撃っていた、ということになる。よって、白兵戦が決着したあと、掃討戦に移行して敵が一方的な鉄炮戦を仕掛けてきて、その時に立花勢では負傷した者が多かった、ということになるだろう。このことは、上述したように、白兵戦に決着が付き、敵が飛道具で重武装して完全な迎撃体制を整えたこと（そうすることにより立花勢の反撃を封殺する）とも符合する。

このように考えると、当時の戦いは、最初の両軍による鉄炮戦（最初の段階）→白兵戦（本格的な戦いの段階）→勝利した側の鉄炮による一方的な掃討戦（最終段階）というように推移したと想定できる。このことは、一つの戦いにおいて、段階は異なるが、鉄炮の集中使用（飛道具主体の戦い＝最初の段階の鉄炮戦と最終段階での鉄炮による一方的な掃討戦）と本格的な白兵戦の両方がお

慶長5年10月20日の江上合戦についての立花宗茂発給の感状と軍忠一見状（合戦手負注文）に関する考察（その2）（白峰）
こなわれており、飛道具主体の戦いがおこなわれたということは、白兵戦がなかったという意味ではないことを示している。

白兵戦の最中に敵が側面から弓矢を集団運用して大きな戦果をあげたことも、飛道具主体の戦いと本格的な白兵戦の両方がおこなわれていたことを示している。このことから、飛道具主体の戦いがおこなわれたということは、白兵戦がなかったという意味ではないことがわかる。

こうした想定（上記の鉄炮の集中使用段階の想定）が他の戦いにおいても一般化できるのかどうか（他の戦いにも適用できるのか）という点については、今後、他の戦いの事例（戦況の推移）も検証する必要がある、その考察については他日を期したい。

[註]

- (1) これまでの研究史における、具体的な関係論文名等については、拙稿「慶長5年9月13日の大津城攻めについての立花宗茂発給の感状と軍忠一見状（合戦手負注文）に関する考察（その1）」（『別府大学大学院紀要』19号、別府学会、2017年）、拙稿「慶長5年9月13日の大津城攻めについての立花宗茂発給の感状と軍忠一見状（合戦手負注文）に関する考察（その2）」（『史学論叢』47号、別府大学史学研究会、2017年）において提示したので、本稿では省略する。
- (2) 鈴木真哉『「戦闘報告書」が語る日本中世の戦場－鎌倉最末期から江戸初期まで－』（洋泉社、2015年）。以下、副題は省略する。
- (3) 「感状」の検討では、戦国前期として、明応7年（1498）～永禄4年（1561）を調査対象期間としている。
- (4) 江上合戦については、中野等・穴井綾香『近世大名立花家』〈柳川の歴史4〉（柳川市、2012年、180～181頁）において「立花勢は鍋島勢との決戦を期して出撃し、十月二十日に柳川城の北に位置する三瀧郡江上（現久留米市）・八院（現大木町・大川市）付近で両軍は衝突する。柳川では、江上合戦あるいは八院の戦いなどと称され、佐賀では柳川合戦として伝わる戦闘である。この合戦で、立花勢は立花三太夫次次らの重臣を失い、蒲池城（現柳川市）を預かる宿老小野鎮幸も重傷を負うなどの大打撃を蒙った。」と説明されている。
- (5) 中西豪「鍋島父子の関ヶ原－龍造寺領国、存続への試練」（『歴史群像』131号、学研パブリッシング、2015年）。
- (6) 佐賀戦国研究会作成の「慶長5年10月20日江上・八院の合戦見取図」（一枚物資料〔リーフレット〕、2014年）。
- (7) 前掲・中野等・穴井綾香『近世大名立花家』（180～181頁）。
- (8) 感状の定義については、『国史大辞典』では「合戦に参加した将士の戦功を賞して発出される文書。感書・御感書ともいう。鎌倉時代の末から江戸時代の初めにかけて、武家時代を通じて長く行われた。」（『国史大辞典』3巻、吉川弘文館、1983年、831頁、「感状」の項、執筆は五味克夫氏）、瀬野精一郎「軍事関係文書」における「感状」の項（『日本古文書学講座』5巻、中世編Ⅱ、雄山閣出版、1981年、45頁）では「合戦のため馳せ参じた武士や、軍忠を抽んでた武士に対し、その戦功を賞するため発給された文書を感状とよぶ。感状は直接給わることに意義があるわけであるから、直状形式の文書様式によって、発給者が文書の奥あるいは日下、身分の高い者が発給する場合は袖判を据えて与える。給わる者の名前が宛名として書

かれるのが原則であり、料紙は縦紙・折紙・切紙・小切紙など種々の料紙が用いられている。」、漆原徹「合戦と軍忠」における「感状」の項（『今日の古文書学』3巻、中世、雄山閣出版、2000年、228頁）では「武士の戦功に対しての褒詞を記した文書で、単に褒詞にとどまるものと、恩賞給付を予告ないし確約するものなど内容にはいくつかの機能的な差異がある。」としている。

- (9) 前掲・中野等・穴井綾香『近世大名立花家』（184頁）。
- (10) 『柳川市史』史料編Ⅴ・近世文書（前編）（柳川市、2011年、244頁）。
- (11) 尚政とは、立花宗茂のことである。以下同様。
- (12) 前掲・拙稿「慶長5年9月の大津城攻めについての立花宗茂発給の感状と軍忠一見状（合戦手負注文）に関する考察（その2）」の表2参照。
- (13) 表5における安東作介（作之介）、堀喜右衛門宛の2例。立花宗茂が家臣だけでなく、又家来（陪臣）に対しても感状を出した点は注目される。
- (14) 前掲『柳川市史』史料編Ⅴ・近世文書（前編）（96頁）。
- (15) 着到状の定義については、『国史大辞典』では「中世、地頭・御家人らの武士が騒擾など変事の発生を聞いて、命令により、または自発的に馳せ参じたとき、その旨を届け出、統率者から証判をうける文書のこと。」（『国史大辞典』9巻、吉川弘文館、1988年、453頁、「著到状」の項、執筆は五味克夫氏）、瀬野精一郎「軍事関係文書」における「着到状」の項（前掲『日本古文書学講座』5巻、中世編Ⅱ、25頁）では「軍勢催促状を受けとった戦闘単位の家長は、それに応じて馳せ参じた場合、軍勢催促状を発給した者、あるいは馳せ参じた武力集団の最高責任者、あるいは直属の指揮官に対し、たしかに馳せ参じたことを示すために提出する文書」、漆原徹「合戦と軍忠」における「着到状」の項（前掲『今日の古文書学』3巻、219頁）では「着到状とは軍勢催促状によって招集された武士が、將軍や守護及び大将のもとに武装して到着した際に提出する文書で、この時証判という確認の花押を招集者側から受けて提出者本人に返却される。一通の文書が、提出者の本文と確認者の承認文言及び花押の双方によって成立して、はじめて文書として機能するこのような型式を複合文書と称する。」としている。
- (16) 軍忠状の定義については、『国史大辞典』では「鎌倉時代から戦国時代にかけて武士が戦闘に参加して活躍した状況や、自身および従者の被害状況を上申する文書」（『国史大辞典』4巻、吉川弘文館、1984年、1046頁、「軍忠状」の項、執筆は五味克夫氏）、瀬野精一郎「軍事関係文書」における「軍忠状」の項（前掲『日本古文書学講座』5巻、中世編Ⅱ、34頁）では「鎌倉時代中期以後になると、合戦の規模が大きくなり、広い範囲から武力集団が馳せ参じて合戦が行なわれるようになると、指揮者がいちいち直接面接して報告を受けることは不可能になってきた。そこで実際に戦闘に参加した者が、合戦における自己の勲功を文書にして提出し、着到状の場合と同様に指揮者の証判をもらって、後日の恩賞のさいの証拠として保存しておくということが一般に行なわれるようになった。このような目的で提出された文書のことを軍忠状という。軍忠状は蒙古襲来を契機として行なわれるようになり、南北朝動乱期に多用され、戦国時代まで形を変えながらも存在している。」、漆原徹「合戦と軍忠」における「着到状」の項（前掲『今日の古文書学』3巻、221頁）では「軍忠状は、戦闘に参加した武士が戦功を上申して確認を受ける文書で、着到

慶長5年10月20日の江上合戦についての立花宗茂発給の感状と軍忠一見状（合戦手負注文）に関する考察（その2）（白峰）

状とおなじく確認の証判を受ける複合文書である。（中略）軍忠状は提出者と提出先の関係により、また戦功の認定の段階などの理由によりいくつかの機能的な相違が認められるが、様式は既存の様式から借りて成立している事情を反映して披露状、言上状、申状、目安状、注進状、注文など多様である。」としている。

- (17) 前掲『柳川市史』史料編V・近世文書（前編）（102頁）。大津城攻めについて立花宗茂が発給した感状には、「分捕高名・被疵・戦死之衆着到、銘々令披見、以袖判申候」（前掲『柳川市史』史料編V・近世文書（前編）、232頁）と記されているものがある。これは、立花宗茂発給の感状（大津城攻め）において、「着到」文言と「袖判」文言が1セット（「着到」文言がある場合は「袖判」文言もある）で出てくることを示している（『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期（上）、財団法人西日本文化協会、1986年、196号文書、『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期（下）、財団法人西日本文化協会、1988年、985号文書、『柳河藩享保八年藩士系図・下』〈柳川歴史資料集成第二集〉、柳川市、1997年、265～266頁も同様。この場合の「袖判」とは軍忠一見状を指す）。しかし、立花宗茂発給の感状（江上合戦）では、「着到」文言がある場合でも「袖判」文言は記されていないが、その理由については今後検討する必要がある。
- (18) 「与力」とは「何騎と数えられるように騎乗の武士であり（後略）」と指摘されている（『日本史大事典』6巻、平凡社、1994年、1066頁、「与力」の項、執筆は林由紀子氏）。
- (19) 佐藤進一『新版古文書学入門』（法政大学出版局、2003年、244頁）。
- (20) よって、表2には、感状の発給年月日、発給者、宛所の項目は入れていない。ただし、表1のスペースに入れられなかった関係上、着到文言の有無、書止文言の項目を表2に入れた。
- (21) 盛本昌広『戦国合戦の舞台裏－兵士たちの出陣から退陣まで－』（洋泉社、2010年、39頁）では「侍はいわゆる侍身分に属する者で、名字を持っていた。（中略）これに対して、中間は名字を持たず、この点で侍とは区別され、普段は使者など雑用に従事していた。（中略）武具や甲冑など装備においては侍より劣るが、合戦の際には戦闘員の一角をなしていた。」と指摘されている。
- (22) 名前の記載がない場合はカウントしなかった。（中間カ）は中間としてカウントした。
- (23) 小数点第二位を四捨五入した。
- (24) 小数点第二位を四捨五入した。
- (25) 中間の小右衛門は重複しているので、1人としてカウントした。
- (26) 名前の記載がない場合はカウントしなかった。ただし、名前の記載がなくても本人と特定できる場合はカウントした。「中間一人」はカウントした。（中間カ）は中間としてカウントした。
- (27) 小数点第二位を四捨五入した。
- (28) 前掲『柳川市史』史料編V・近世文書（前編）（102頁など）、『柳川市史』史料編V・近世文書（後編）（柳川市、2012年、263頁など）。
- (29) 前掲『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期（上）（79号文書など）、前掲『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期（下）（983号文書など）。
- (30) 『新修福岡市史』資料編、中世2（福岡市、2014年、996～997頁）。
- (31) 前掲『柳河藩享保八年藩士系図・下』（140、266、321頁）。

- (32) 前掲『柳川市史』史料編V・近世文書(前編)(102頁)。
- (33) 前掲『柳川市史』史料編V・近世文書(前編)(20頁)。
- (34) 前掲『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期(下)(1052号文書)。
- (35) 「大津御一戦之時母袋掛候衆」(「立花家旧記」)、「与力附侍帳」,「文禄五年朝鮮御陣御家中軍役高付騎馬并鉄^(ママ)鉦付之覚」,「慶長五年侍帳」(『柳河藩立花家分限帳』〈柳川歴史資料集成第三集〉、柳川市、1998年)。
- (36) 小数点第二位を四捨五入した。
- (37) 小数点第二位を四捨五入した。
- (38) それぞれの%は小数点第二位を四捨五入した。
- (39) 感状での戦死者16人、軍忠一見状での戦死者83人に名前の重複はないのでそのまま加算した。
- (40) 江上合戦において、立花宗茂が感状を家臣に対して出したことは確認できるものの、出された感状の文面は管見では確認できない事例があるので、立花家の軍勢では戦死者が100名以上であったことは確実である。例えば、十時虎実は「江上表一戦刻、被鎗疵并與力・家来、或被疵或戦死、依之賜御感状」(『柳河藩享保八年藩士系図・上』〈柳川歴史資料集成第一集〉、柳川市、1996年、63頁)とあるように、江上合戦において、十時虎実は鎗疵を受け、その与力や家来が負傷したり、戦死をしたため、立花宗茂が感状を出したことがわかる。この十時虎実の与力や家来の戦死者(何名かはわからないが1名以上であるとすると)を含めると、戦死者が100名以上であったことは確実である。
- (41) 打物(うちもの)とは「(打ち斬るもの、の意から)刀剣、薙刀(なぎなた)、槍などの武器の総称」(『日本国語大辞典(第二版)』2巻、小学館、2001年、326～327頁)、「特に、打鍛えて造った武器。太刀・槍などの類。」(室町時代語辞典編集委員会編『時代別国語大辞典(室町時代編一)』、三省堂、1985年、771頁)という意味である。
- (42) この軍忠一見状には「三池伊兵衛尉家中之者」と記されているので、この「家中」は「三池伊兵衛尉」の「家中」を意味しているものであり、立花家中という意味ではないことがわかる。こうした「家中」の位置付けは、三池伊兵衛尉とその麾下の者によって一つの「家」が形成されている、ということを明確に示している。そして、その「家」単位で戦いに参加したということがわかる。
- (43) 上述のように、鈴木氏は永禄6年(1563)から寛永15年(1638)までの時代を「戦国後期」(鉄砲による死傷者が現れて以後)と規定している。
- (44) 鈴木貞哉『戦国軍事史への挑戦-疑問だらけの戦国合戦像-』(洋泉社、2010年、239頁)。
- (45) 前掲・鈴木貞哉『戦闘報告書』が語る日本中世の戦場』(61頁)。ちなみに、71.52パーセントとは、鉄砲疵・手火矢疵45.21パーセント、矢疵17.33パーセント、石疵・礮疵8.97パーセントを合計した数字である。ただし、細かいことで恐縮であるが、実際に合計を計算すると71.51パーセントになる。
- (46) 立花三太夫の石高は、「大津御一戦之時母袋掛候衆」(「立花家旧記」)、「文禄五年朝鮮御陣御家中軍役高付騎馬并鉄^(ママ)鉦付之覚」,「慶長五年侍帳」(前掲『柳河藩立花家分限帳』)による。
- (47) ただし、「被官・中間」の1000石の3例のうち、立花新右衛門尉には与力3人、立花三太夫には与力2人がいたことは、「与力附侍帳」(前掲『柳河藩立花家分限帳』)からわかるので、軍忠一見状(江上合戦)

慶長5年10月20日の江上合戦についての立花宗茂発給の感状と軍忠一見状（合戦手負注文）に関する考察（その2）（白峰）

には与力の名前が出てこなかっただけ、ということなのであろう。よって、この場合、後述するような、家臣－与力－被官という関係は存在したと考えられる。

- (48) 石高は「慶長五年侍帳」（前掲『柳河藩立花家分限帳』）による。なお、「慶長五年侍帳」には「福有次助」と記載されている。
- (49) 「与力」の定義については、「与力はもと与力同心ということで、加勢することを意味する言葉であるが、やがて加勢する人そのものを指すようになった（鎌倉時代）。室町時代には大名らに従っている武士をいうようになり、被官と同じ意味で用いられている。安土桃山時代には、より有力な大名に付属させられた大名も与力と呼ばれ、また侍大将や足軽大将らに付けられた騎士を指す呼称ともなるが、江戸時代に入ると大名を与力と称することはなくなり、後者の意味が引き継がれることになる。」（『国史大辞典』14巻、吉川弘文館、1993年、472頁、「与力」の項、執筆は横山則孝氏）、「本来、力を与^{とも}にして加勢する人を意味する語で、鎌倉時代から見られ、寄騎とも書いた。戦国時代、大名が家臣団を編成するにあたり、有力部将を寄親^{よりおや}とし、これに寄子^{よりこ}としてその指揮に従う武士を付属せしめ（寄親・寄り）、これを寄騎（与力）、同心^{どうしん}などと称したが、このうち与力は、何騎と数えられるように騎乗の武士であり、地侍^{じざむらい}・小領主層の出身者であったと考えられている。」（前掲『日本史大事典』6巻、1066頁、「与力」の項、執筆は林由紀子氏）としている。上述のように、『国史大辞典』では「与力」について「室町時代には（中略）被官と同じ意味で用いられている。」としているが、時代は異なるものの、後述のように、立花宗茂発給の軍忠一見状（江上合戦）の検討からは、「与力の従者が被官」ということがわかるので、この場合は「与力」＝「被官」という関係ではないことになる。『日葡辞書』では「与力（ヨリキ）」について「軍隊の中で、また、重立った主君への奉公を勤めるのに、他の人に従属している者」（土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』、岩波書店、1980年、829頁）としている。この意味からは、封建的主従関係において軍役（奉公）を務めるうえで、（主君に）従属している者、という理解になるだろう。この場合、「軍隊の中で」と記されていることから、戦時における従属関係にある者、ということになり、この点には注意したい。
- (50) 「被官」の定義については、「被管とも表現され、元来は管轄される者の総称であり、令制にあっては上級官庁に対する直属の下級官庁を指した。平安時代後期以降は家人・家来と同義に用いられるようになったが、中世前期には法制用語として被官概念は成熟しておらず、概して有力者と劣勢者の関係における後者の漠然たる呼称にすぎなかった。その意味では広く主従関係上での従者をあらわす用語として使用されたもので、武家固有の従者群－家人・郎等－と同列に扱うことはできず、被官の主人たり得たものには、武士以外に貴族・寺僧・神官・百姓など、さまざまな階層があった。（中略）武家被官の場合、一定の資格をもって主従的結合をなした者を指し（中略）武家被官の階層に関しては中世前期にあってはその本来的語義から従者はすべて被官であり、国人も守護被官として扱われた。その後大名領国制下において被官の用法が固定化され、一定の階層にのみ用いられるようになった。（中略）被官と郎従との類似性が指摘でき、この両者が同一の階層の呼称であることを確認し得る。（後略）」（『国史大辞典』11巻、吉川弘文館、1990年、853～854頁、「被官」の項、執筆は関幸彦氏）、「被管とも書き、もともとは管轄される者の意であるが、平安後期以後には家人、家来^{けにん けらい}と同じ意味で使われるようになった。ただ家人中でも比較的身分の

低い者を指し、それよりさらに低い下人^{げにん}とは区別された。被官の語は、郎従^{ろうじゅう}や家人等と違って武士特有の語ではないため、鎌倉時代以後、広く主従関係の従者を表す用語として使われるようになった点に特徴がある。被官の主人は武士をはじめ貴族、寺僧^{じそう}、神官^{しんかん}、官人^{くわんじん}、女房^{にようぼう}等さまざまな階層に及び、被官も武士、法師、商人^{ひやくしやう}、百姓^{ひやくしやう}等さまざまである。主人-被官関係は中世社会を貫く一般的な主従関係であり、中世社会の骨格をなしていたと言えよう。被官がさらに被官をかかえると、かかえられた被官を又被官^{またひかん}と呼ぶ。(後略) (前掲『日本史大事典』5巻、平凡社、1993年、963頁、「被官」の項、執筆は五味文彦氏)としている。『日葡辞書』では「被官(ヒクワン)」について「家来」としている(前掲『邦訳日葡辞書』、241頁)。『日葡辞書』では、このほかに「又被官(マタビクワン)」について「家来のそのまた家来」(前掲『邦訳日葡辞書』、388頁)、「里被官(サトビクワン)」について「ある村に住んでいて主君に仕える家臣で、主君から呼び寄せられた時には、それに対する一定の住い・住居費用を貰う者」(前掲『邦訳日葡辞書』、561頁)、「重代(デュウダイ)の被官」について「何代にもわたる昔からの家臣」(前掲『邦訳日葡辞書』、320頁)、「日比召し使うた被官」について「長期間召し使った家臣」(前掲『邦訳日葡辞書』、399頁)という用例を載せている。これらの用例も含めて考えると、『日葡辞書』では、「被官」=「家来」、「家臣」という意味で使用していることがわかる。

- (51) 「与力附侍帳」(前掲『柳河藩立花家分限帳』)。
- (52) 上述のように、立花宗茂発給の軍忠一見状(江上合戦)には被官の名前が記されていないのに対して、立花宗茂発給の感状(江上合戦)には被官の名前が記されている理由については、今後の検討課題である。
- (53) 石高については、安東彦右衛門尉は「大津御一戦之時母袋掛候衆」(「立花家旧記」)、「文禄五年朝鮮御陣御家中軍役高付騎馬并鉄鉋^(マツ)付之覚」、「慶長五年侍帳」(前掲『柳河藩立花家分限帳』)、立花助兵衛は「文禄五年朝鮮御陣御家中軍役高付騎馬并鉄鉋^(マツ)付之覚」、「慶長五年侍帳」(前掲『柳河藩立花家分限帳』)、丹半左衛門尉は「文禄五年朝鮮御陣御家中軍役高付騎馬并鉄鉋^(マツ)付之覚」、「慶長五年侍帳」(前掲『柳河藩立花家分限帳』)による。
- (54) 立花三太夫は慶長5年9月13日の大津城攻めでは立花宗茂から感状を発給されているが(前掲『柳川市史』史料編V・近世文書(後編)、557頁)、江上合戦で戦死した。そのため、江上合戦についての立花宗茂発給の感状は子の立花乙壽に対して発給された(前掲『柳川市史』史料編V・近世文書(後編)、557頁)。よって、江上合戦の感状は立花三太夫に対しては発給されていない。
- (55) 前掲『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期(上)(82号文書)と前掲『柳川市史』史料編V・近世文書(前編)(132~134頁)に収載されている。前者の活字翻刻と後者の活字翻刻を比較すると、文言が相違する箇所が若干あるが、本稿では前者をもとに筆者(白峰)が現代語訳をおこなった。この「覚」の「表紙上書」には「於肥後国高瀬、小野和泉・立花吉左衛門・十時源兵衛、三人申分」と記されているので(前掲『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期(上)(82号文書))、立花宗茂の改易後、この3人が加藤清正の家臣になっていた時に述べた内容と思われる。
- (56) 以下、史料の現代語訳は長文なので適宜▼を付して各文章を区切り、史料の現代語訳の箇所は四角の枠で囲んだ。そして、適切な箇所でも適宜、筆者(白峰)のコメントを付けた。

慶長5年10月20日の江上合戦についての立花宗茂発給の感状と軍忠一見状（合戦手負注文）に関する考察（その2）（白峰）

- (57) 「競り合い」とは「接近したいくさ」という意味である（『日本国語大辞典（第二版）』7巻、小学館、2001年、1452頁）。
- (58) 「鎗」は比喩として「戦闘、あるいは、交戦」を意味する（前掲『邦訳日葡辞書』、811頁）。この史料（①「小野和泉が申し上げた覚」）には、「鎗場」（＝戦場、前掲『邦訳日葡辞書』、811頁）、「鎗」（＝戦闘、あるいは、交戦、前掲『邦訳日葡辞書』、811頁）、「鎗合せ」（＝戦闘、前掲『邦訳日葡辞書』、811頁）、「横鎗」（＝両軍が戦闘している時、横あいから別の一隊が槍で突きかかること、『日本国語大辞典（第二版）』13巻、小学館、2002年、599頁）などの記載があり、このことは戦場において鎗の使用が常態化していたことを示している。このことは戦場での接近戦（白兵戦）での主力武器が鎗であったことをも示している。
- (59) 前掲註（58）参照。
- (60) 前掲註（58）参照。
- (61) 「おがみ打ち」とは、「（拝むような形で刀を持つところから）刀の柄（つか）を両手で握り、頭上高く構えてからまっすぐに切り下ろすこと」という意味である（前掲『日本国語大辞典（第二版）』2巻、1026頁）。
- (62) この史料（①「小野和泉が申し上げた覚」）の中で「馬」の初出である。
- (63) 前掲『邦訳日葡辞書』（295頁）では「下人（ゲニン）」の意味として「（下の人）従僕・家来、または、奉公人」としているため、この場合の「下人」は「家来」という意味であろう。
- (64) ニツ玉とは「火縄筒（ひなわづつ）に十匁の弾丸（たま）を二つこめて撃つこと。また、その弾丸。」という意味である（『日本国語大辞典（第二版）』11巻、小学館、2001年、894頁）。
- (65) 前掲註（58）参照。
- (66) 前掲註（57）に同じ。
- (67) 前掲註（57）に同じ。
- (68) 前掲註（58）参照。
- (69) 前掲註（57）に同じ。
- (70) 前掲註（57）に同じ。
- (71) 前掲註（58）参照。
- (72) 前掲註（58）参照。
- (73) 前掲註（58）参照。
- (74) 前掲・中西豪「鍋島父子の関ヶ原－龍造寺領国、存続への試練」では「柳川合戦では、もっぱら立花側の編纂史料に依拠して「十二段に布陣した一万二〇〇〇の龍造寺・鍋島勢を立花軍は九段まで切り崩したのが衆寡敵せずして攻めきれず引分け」といった経過が語られる。しかし、龍造寺・鍋島勢が十二段に布陣したことは確かだが、直茂の本陣ははるか後方の城島城の城外という縦深陣であった。立花側が龍造寺・鍋島勢の本陣と目した五反田は実は先手大将・茂里の本陣であり、龍造寺・鍋島勢で戦闘に加入したのは先手から第三陣までの兵力三〇〇〇前後に過ぎず、立花勢は約一三〇〇程度であった。現地に残る立花側将士の墓・供養塔の分布から見ても戦域の縦深は一キロメートル前後と思われる。」と指摘されている。この点については、本稿の図3（前掲・中西豪「鍋島父子の関ヶ原－龍造寺領国、存続への試練」から

引用した「柳川合戦②激突」の図)を参照されたい。第2回佐賀戦国勉強会・座談会(2016年10月30日、於佐賀商工ビル〔佐賀市市民活動プラザ〕4階大会議室)における、中西豪氏の報告「日峯様史観の軌道修正-朝鮮史研究に於ける史料批判を参考に-」の質疑応答において、中西氏は柳川合戦(江上合戦)について、①不期遭遇戦であり、立花勢は五月雨式に出撃した、②龍造寺・鍋島勢は先手だけで戦った、という点を指摘した。この点は、江上合戦を考えるうえで重要な論点である。※「日峯様史観」(日峯は鍋島直茂の法名)とは、中西豪氏によるオリジナルの歴史観であり、中西氏は「鍋島氏の正当性を言うがあまり、直茂を無謬にして絶対であったとする見方は、さしずめ「日峯様史観」と名付けてよいかもしれない。」(中西豪「肥前の老虎・鍋島直茂-その男、篡奪者にあらず」、『歴史群像』124号、学研パブリッシング、2014年)と指摘している。

- (75) 花岡興輝校訂・解説「熊本県史料・中世編補遺(1)」(『熊本史学』40号、熊本史学会、1972年、18号文書)。
- (76) 『島津家文書之四』〈大日本古文書〉(東京大学史料編纂所、2011年、1698号文書)。同書では1698号文書について、「立花親成 宗茂 書状案」としており、「書状案」としている理由は、この文書に立花親成(宗茂)の花押が据えられていないことによるものと考えられる。この立花親成(宗茂)書状案は、『鹿兒島県史料・旧記雑録後編三』(鹿兒島県、1983年、602～603頁)にも収載されているが、前掲『島津家文書之四』(1698号文書)と比較すると字句が異なる箇所がある。
- (77) この立花宗茂の書状で「龍造寺」と記されていることは、この時点(慶長5年10月)での当主は龍造寺家であり、鍋島家は陣代という立場であったことを明確に示している。このことを他大名である立花宗茂がそのように認識していた(鍋島家の軍勢ではなく龍造寺家の軍勢と認識していた)ということが一次史料で確認できる点は重要である。なお、龍造寺家から鍋島家への領主交代については、前掲・中西豪「肥前の老虎・鍋島直茂-その男、篡奪者にあらず」を参照されたい。前掲・中西豪「肥前の老虎・鍋島直茂-その男、篡奪者にあらず」では「佐賀藩は、鍋島氏と龍造寺氏一門の連合政権的な性格が強い。鍋島氏が新当主となったのは「下剋上」や「篡奪」ではないことは当事者間では自明のことであった」と指摘されている。この中西氏の指摘は通説に対する批判的見解として重要な指摘である。
- (78) 前掲『邦訳日葡辞書』(428頁)では「人数を催す」の意味として「戦争などのために、軍勢をうながし準備をする」としている。
- (79) 前掲『邦訳日葡辞書』(295頁)では「下城(ゲジャウ)」の意味として「(城より下る)城から下ること、または、降参して敵に城を引き渡すこと」としている。
- (80) 前掲『邦訳日葡辞書』(214頁)では「端々(ハシバシ)」の意味として「ある事物のいくつかの縁(ふち)、あるいは、いくつかの末端」としている。そして、「(在所の端々)村のはずれ・郊外」としている。よって、「愚領中はし〜」は、立花宗茂の領内の郊外、という意味と考えられる。
- (81) 「仕寄(しよせ)」とは「城などに攻め寄せること」という意味である(前掲『日本国語大辞典(第二版)』7巻、369頁)。
- (82) 前掲『島津家文書之四』(159頁)では「筑紫主水」について「(筑紫)廣門」に比定している。『新訂寛政重修諸家譜』第12(続群書類従完成会、1965年、152頁)によれば、筑紫廣門は父の筑紫廣門(上野介)

慶長5年10月20日の江上合戦についての立花宗茂発給の感状と軍忠一見状（合戦手負注文）に関する考察（その2）（白峰）

と子の筑紫廣門（主水正）の2人が存在しており、この場合、「筑紫主水」と記されているので、子の筑紫廣門（主水正）に該当する。なお、「筑紫」の読みについては、『寛永諸家系図伝』第9（続群書類従完成会、1986年、237頁）では「ちくし」、前掲『新訂寛政重修諸家譜』第12（150頁）では「つくし」としている。

- (83) 前掲『島津家文書之四』（159頁）では「有馬」について「（有馬）豊氏」に比定しているが、有馬豊氏が久留米に移封されるのは元和6年であるので、この場合の「有馬」は有馬晴信に比定すべきである。
- (84) この記載から、敵との圧倒的な軍勢数の差により立花宗茂は居城の柳川城への籠城に追い込まれたことがわかる。
- (85) [史料5]における「押詰」の「押」は接頭語である。「詰」については、前掲『邦訳日葡辞書』（629頁）では「（城を詰むる）城を窮迫した状態にする。または、城を攻め戦う。」という意味としている。前掲・室町時代語辞典編集委員会編『時代別国語大辞典（室町時代編一）』（1004頁）では「押詰む（おしつむ）」の意味として「攻めていって、敵を活動する余地のない状態にする」としている。
- (86) [史料5]における「數刻」については、前掲『邦訳日葡辞書』（582頁）では「數剋（スコク）」の意味として「多くの時」としている。
- (87) [史料5]における「詰陣」については、前掲『邦訳日葡辞書』（629頁）では「詰陣（ツメヂン）」の意味として「ある城に攻めかかるための軍隊の陣、または、非常に近接して、敵と相対している軍隊の陣」としている。室町時代語辞典編集委員会編『時代別国語大辞典（室町時代編四）』（三省堂、2000年、92頁）では「詰陣（つめぢん）」の意味として「一気に攻略すべく、敵の間近に構える本陣」としている。

表 1

江上合戦（慶長 5 年 10 月 20 日）についての立花宗茂発給の感状

	発給年月日	発給者	宛 所	原写	内容の摘要	出 典
1	(慶長 5 年) 12 月 2 日	立花宗茂	安東彦右衛門尉 (常久)	写	「其方被官」2 人が分捕の高名	柳川市史 - 前編 11 頁
	(慶長 5 年) 12 月 2 日	立花宗茂	安東彦右衛門尉 (常久)	写	「其方被官」2 人が分捕の高名	福岡県史 - 下 1091 号
2	(慶長 5 年) 12 月 2 日	立花宗茂	安東孫兵衛尉 (連州)	写	「其方内之者」4 人 (5 人カ) が戦死、2 人が被疵	柳川市史 - 前編 18 頁
	(慶長 5 年) 12 月 2 日	立花宗茂	安東孫兵衛尉 (連州)	写	「其方内之者」5 人が戦死、2 人が被疵	福岡県史 - 下 1092 号
3	(慶長 5 年) 12 月 2 日	立花宗茂	安東孫兵衛尉 (連州)	原	「其方内之者」5 人が戦死、2 人が被疵	柳川市史 - 前編 645 ~ 646 頁
	(慶長 5 年) 12 月 2 日	立花宗茂	安東二左衛門尉	写	叔父五郎右衛門尉が戦死、「与力・被官・中間」の被疵、或いは、戦死の衆の着到に披見を加えた	柳川市史 - 前編 20 頁
	(慶長 5 年) 12 月 2 日	立花宗茂	安東二左衛門尉	写	叔父五郎右衛門尉が戦死、「与力・被官・中間」の被疵、或いは、戦死の衆の着到に披見を加えた	福岡県史 - 下 1093 号
4	(慶長 5 年) 12 月 2 日	立花宗茂	小野和泉守 (鎮幸)	原	2 ケ所被疵、「其方与力・被官・中間数十人」の手負、或いは、戦死の衆の着到を銘々披見した	柳川市史 - 前編 96 頁
	(慶長 5 年) 12 月 2 日	立花宗茂	- (小野和泉守) <small>(注 1)</small>	原	2 ケ所被疵、「其方与力・被官・中間数十人」の手負、或いは、戦死の衆の着到を銘々披見した	福岡県史 - 上 81 号
	(慶長 5 年) 12 月 2 日	立花宗茂	小野和泉守 (鎮幸)	写	2 ケ所被疵、「其方与力・被官・中間数十人」の手負、或いは、戦死の衆の着到を銘々披見した	福岡県史 - 上 140 号
5	(慶長 5 年) 12 月 2 日	立花宗茂	小野源左衛門尉 (正利)	写	「中間」1 人が被疵	福岡県史 - 上 153 号
6	(慶長 5 年) 12 月 2 日	立花宗茂	立花吉左衛門尉 (成家)	原	2 ケ所被疵、「其方与力・被官・中間数十人」の被疵、或いは、分捕の高名、戦死の衆について、銘々、着到に披見を加えた	柳川市史 - 前編 232 頁
	(慶長 5 年) 12 月 2 日	立花宗茂	立花吉左衛門尉 (成家)	原	2 ケ所被疵、「其方与力・被官・中間数十人」の被疵、或いは、分捕の高名、戦死の衆について、銘々、着到に披見を加えた	福岡県史 - 上 198 号

7	(慶長5年)12月2日	立花宗茂	立花三河入道 (賢賀)	原	「其方被官」1人が分捕の高名、「中間」1人が被疵の着到について銘々に披見を加えた	柳川市史－前編 232頁
	(慶長5年)12月2日	立花宗茂	立花三河入道 (賢賀)	原	「其方被官」1人が分捕の高名、「中間」1人が被疵の着到について銘々に披見を加えた	福岡県史－上 197号
8	(慶長5年)12月2日	立花宗茂	佐田清兵衛尉 (統春)	原	親父平右衛門尉が戦死、「中間」1人が届けた	柳川市史－前編 244頁
	(慶長5年)12月2日	立花宗茂	佐田清兵衛尉 (統春)	写	親父平右衛門尉が戦死、「中間」1人が届けた	福岡県史－上 233号
9	(慶長5年)12月2日	立花宗茂	佐田清兵衛尉 (注2)	原	(中間)1人が届けた	福岡県史－上 234号
10	(慶長5年)12月2日	立花宗茂	立花新右衛門尉 (親勝)	写	親父了均と善次郎が戦死、そのほか「被官・中間」の被疵、或いは、戦死の者の着到について銘々に披見を加えた	柳川市史－前編 321～322頁
	(慶長5年)12月2日	立花宗茂	立花新右衛門 (親勝)	写	親父了均と善次郎が戦死、そのほか「被官・中間」の被疵、或いは、戦死の着到について銘々に披見を加えた	福岡県史－下 564号、1294号
	(慶長5年)12月2日	立花宗茂	立花新右衛門 (親勝)	原	親父了均と善次郎が戦死、そのほか「被官・中間」の被疵、或いは、戦死の着到について銘々に披見を加えた	福岡市史－中世 997頁
11	(慶長5年)12月2日	立花宗茂	十時摂津守 (連貞)	原	「其方与力・被官・中間」の被疵、或いは、戦死の衆の着到を銘々披見した	柳川市史－前編 684頁
	(慶長5年)12月2日	立花宗茂	十時摂津 (連貞)	写	「其方与力・被官・中間」の被疵、或いは、戦死の衆の着到を銘々披見した	福岡県史－下 684号
12	(慶長5年)12月2日	立花宗茂	許斐藤兵衛	原	父専允が戦死、「内之者」3人が被疵	柳川市史－後編 4頁
13	(慶長5年)12月2日	立花宗茂	問注所三右衛門尉 (政連)	原	「其方手之者」の被疵、或いは、戦死の衆について、銘々、着到に披見を加えた	柳川市史－後編 264頁
	(慶長5年)12月2日	立花宗茂	問注所三右衛門尉 (政連)	原	「其方手之者」の被疵、或いは、戦死の衆について、銘々、着到に披見を加えた	福岡県史－下 1013号
14	(慶長5年)12月2日	立花宗茂	由布大炊助 (惟貞)	写	「其方」粉骨、「与力・被官」の被疵、或いは、戦死の着到について、銘々に披見を加えた	柳川市史－後編 352頁
15	(慶長5年)12月2日	立花宗茂	吉弘伝次 (政宣)	写	「其方手之者」の被疵、或いは、戦死の衆の着到を銘々披見した	柳川市史－後編 410頁

16	(慶長 5 年)12 月 2 日	立花宗茂	立花乙壽	写	「其方父」三太夫が戦死、「内之者」が被疵、或いは、戦死の着到に披見を加えた	柳川市史 - 後編 557 頁
17	(慶長 5 年)12 月 2 日	立花宗茂	立花助兵衛	写	「其方被官」3 人が分捕の高名、2 人が被疵の着到に披見を加えた	柳川市史 - 後編 562 頁
18	(慶長 5 年)12 月 2 日	立花宗茂	十時平介 (惟久)	写	「自身」被疵、1 人被疵、3 人戦死	柳川市史 - 後編 657 頁
	(慶長 5 年)12 月 2 日	立花宗茂	十時平介 (惟久)	写	「自身」被疵、1 人被疵、3 人戦死	福岡県史 - 下 677 号
19	(慶長 5 年)12 月 2 日	立花宗茂	丹半左衛門尉 (親次)	写	「其方被官」1 人が被疵、或いは、戦死の者の着到を銘々披見した	福岡県史 - 上 204 号
20	(慶長 5 年)12 月 2 日	立花宗茂	斉藤左馬助 (統安)	写	「其方」被疵、「被官・中間」の被疵、或いは、戦死の衆の着到に披見を加えた	福岡県史 - 上 212 号
21	(慶長 5 年)12 月 6 日	立花宗茂	長伊勢王 (喬祐)	写	父大学允が戦死	福岡県史 - 上 59 号
	(慶長 5 年)12 月 6 日	立花宗茂	長伊勢王 (喬祐)	写	父大学允が戦死	柳川藩 - 下 151 ~ 152 頁
22	(慶長 5 年)12 月 2 日	立花宗茂	安東作介	写	被疵、「中間」の 2 人が被疵	柳川藩 - 下 501 頁
23	(慶長 5 年)12 月 2 日	立花宗茂	立花織部佐 (親家)	写	「被官・中間数十人」の被疵、或いは、戦死の衆の着到を銘々披見した	福岡県史 - 下 560 号
24	(慶長 5 年)12 月 2 日	立花宗茂	福有次介 (直親)	写	「中間」1 人が被疵	福岡県史 - 下 583 号
25	(慶長 5 年)12 月 12 日 (ママ) (2 日カ)	立花宗茂	堀喜右衛門 ^(註3) (安)	写	「其方被官」2 人被疵	福岡県史 - 下 962 号
26	(慶長 5 年)12 月 2 日	立花宗茂	堀喜四郎 (貞治)	写	父勘解由允が戦死、「被官」2 人が被疵	福岡県史 - 下 968 号
27	(慶長 5 年)12 月 2 日	立花宗茂	三池伊兵衛尉 (親家)	原	「自身」被疵、「家中之者」が分捕、或いは、被疵、戦死の衆の着到を銘々披見した	福岡県史 - 下 982 号
28	(慶長 5 年)12 月 2 日	立花宗茂	安部宗左衛門	写	頸 2 を分捕の高名	福岡県史 - 下 1257 号
29	(慶長 5 年)12 月 2 日	立花宗茂	東郷太郎兵衛	写	頸 2 を分捕の高名	福岡県史 - 下 1258 号
30	(慶長 5 年)12 月 2 日	立花宗茂	谷田長助	写	「其方被官」2 人が被疵	福岡県史 - 下 1332 号

※感状の記載内容において、被疵、戦死等について個人名が記されていても、上表では人数に置き換えて表記した。ただし、一部例外はある。

※上表の宛所について、『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期(下)(財団法人西日本文化協会、1988年、622～690頁)の人名索引により実名が判明する者は()内に記した。

※上表の宛所について、丹半左衛門尉の実名は、中野等・穴井綾香『近世大名立花家』〈柳川の歴史 4〉(柳川市、

2012年、181頁）によった。

【出典の凡例】

柳川市史－前編…『柳川市史』史料編Ⅴ、近世文書（前編）（柳川市、2011年）

柳川市史－後編…『柳川市史』史料編Ⅴ、近世文書（後編）（柳川市、2012年）

福岡県史－上…『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期（上）（財団法人西日本文化協会、1986年）

福岡県史－下…『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期（下）（財団法人西日本文化協会、1988年）

福岡市史－中世…『新修福岡市史』資料編、中世2（福岡市、2014年）

柳河藩－下…『柳河藩享保八年藩士系図・下』〈柳川歴史資料集成第二集〉（柳川市、1997年）

（注1）宛所の記載はないが、包紙上書は「小野和泉守殿」となっている（『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期（上）、財団法人西日本文化協会、1986年、81号文書）。

（注2）宛所の「佐田清兵衛尉殿」という記載は、本文より前の位置の下方に記されている（前掲『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期（上）、234号文書）。

（注3）堀善右衛門宛（『柳河藩享保八年藩士系図・下』〈柳川歴史資料集成第二集〉、柳川市、1997年、123頁）の感状（江上合戦）も同文である。『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期（下）（財団法人西日本文化協会、1988年、676頁）の人名索引によれば、堀善右衛門と堀喜右衛門は同一人物である。

表2

江上合戦(慶長5年10月20日)についての立花宗茂発給の感状等における被疵・戦死等の記載に関する表

	感状の宛所	名 前	状 況	着到文言 の有無	書止 文言	出 典
1	安東彦右衛門尉 (常久)	「其方被官」和田六兵衛 三右衛門(中間カ)	分捕高名 分捕高名	×	C	柳川市史-前編11頁 柳川市史-前編11頁
2	安東孫兵衛尉 (連州)	「其方内之者」今村惣右衛門尉 「其方内之者」新三郎(中間カ) 「其方内之者」新兵衛(中間カ) 「其方内之者」弥右衛門尉(中間カ) 「其方内之者」作内(中間カ) 「其方内之者」傳次郎(中間カ) 「其方内之者」与介(中間カ)	戦死 戦死 戦死 戦死 戦死 被疵 被疵	×	C (注1)	柳川市史-前編645頁 柳川市史-前編645頁 柳川市史-前編645頁 柳川市史-前編645頁 柳川市史-前編645頁 柳川市史-前編645頁 柳川市史-前編645頁
3	安東二左衛門尉	「叔父」(安東)五郎右衛門尉 「与力・被官・中間」	戦死 被疵・戦死	○	C	柳川市史-前編20頁 柳川市史-前編20頁
4	小野和泉守 (鎮幸)	- (小野和泉守) 「其方与力・被官・中間数十人」	2ヶ所被疵 手負・戦死	○	A	柳川市史-前編96頁 柳川市史-前編96頁
5	小野源左衛門尉 (正利)	「中間一人」	被疵	×	B	福岡県史-上、153号
6	立花吉左衛門尉 (成家)	- (立花吉左衛門尉) 「其方与力・被官・中間数十人」	2ヶ所被疵 被疵・分捕高 名・戦死	○	A	柳川市史-前編232頁 柳川市史-前編232頁
7	立花三河入道 (賢賀)	「其方被官」新海市允 「中間」三介	分捕高名 被疵	○	A	柳川市史-前編232頁 柳川市史-前編232頁
8	佐田清兵衛尉 (統春)	「親父」(佐田)平右衛門尉 「中間」小右衛門が届けた	戦死 軍忠	×	B	柳川市史-前編244頁 柳川市史-前編244頁
9	佐田清兵衛尉 (統春)	「中間」小右衛門が届けた	軍忠	×	B	福岡県史-上、234号
10	立花新右衛門尉 (親勝)	「親父」(立花)了均 (立花)善次郎 そのほか「被官・中間」	戦死 戦死 被疵・戦死	○	A	柳川市史-前編321頁 柳川市史-前編321頁 柳川市史-前編321頁
11	十時撰津守 (連貞)	「其方与力・被官・中間」	被疵・戦死	○	A	柳川市史-前編684頁
12	許斐藤兵衛	「父」(許斐)専允(注2) 「内之者」二作(中間カ) 「内之者」三八郎(中間カ) 「内之者」三右衛門(中間カ)	戦死 被疵 被疵 被疵	×	C	柳川市史-後編4頁 柳川市史-後編4頁 柳川市史-後編4頁 柳川市史-後編4頁
13	間注所三右衛門尉 (政連)	「其方手之者」	被疵・戦死	○	D (注3)	柳川市史-後編264頁
14	由布大炊助 (惟貞)	「其方」(由布大炊助) 「与力・被官」	粉骨 被疵・戦死	○	D	柳川市史-後編352頁
15	吉弘伝次 (政宣)	「其方手之者」	被疵・戦死	○	A	柳川市史-後編410頁
16	立花乙壽	「其方父」(立花)三太夫 「内之者」	戦死 被疵・戦死	○	A	柳川市史-後編557頁

17	立花助兵衛	「其方被官」川野利兵衛 「其方被官」小出田源兵衛 「其方被官」平田三右衛門 中田甚右衛門 善八郎（中間カ）	分捕高名 分捕高名 分捕高名 被疵 被疵	○	A	柳川市史－後編562頁
18	十時平介 （惟久）	「自身」(十時平介) 十時五郎左衛門 十時新五郎 江崎吉蔵 石橋市右衛門	被疵 被疵 戦死 戦死 戦死	×	B	柳川市史－後編657頁
19	丹半左衛門尉 （親次）	「其方被官」	被疵・戦死	○	A	福岡県史－上、204号
20	斉藤左馬助 （統安）	「其方」(斉藤左馬助) 「被官・中間」	被疵 被疵・戦死	○	A	福岡県史－上、212号
21	長伊勢王 （喬祐）	「父」(長)大学允	戦死	×	D	柳河藩－下、151～152頁
22	安東作介	－（安東作介） 「中間」清次郎 「中間」甚介	被疵 被疵 被疵	×	D	柳河藩－下、501頁
23	立花織部佐 （親家）	「被官・中間数十人」	被疵・戦死	○	A	福岡県史－下、560号
24	福有次介 （直親）	「中間」弥七郎	被疵	×	B	福岡県史－下、583号
25	堀喜右衛門 ^(註4) （安）	「其方被官」西原孫作 「其方被官」川上新右衛門	被疵 被疵	×	C	福岡県史－下、962号
26	堀喜四郎 （貞治）	「父」(堀)勘解由允 「被官」畑九介 「被官」神田孫三郎	戦死 被疵 被疵	×	C	福岡県史－下、968号
27	三池伊兵衛尉 （親家）	「自身」(三池伊兵衛尉) 「家中之者」	被疵 分捕・被疵・ 戦死	○	A	福岡県史－下、982号
28	安部宗左衛門	－（安部宗左衛門）	頸2分捕高名	×	D	福岡県史－下、1257号
29	東郷太郎兵衛	－（東郷太郎兵衛）	頸2分捕高名	×	C	福岡県史－下、1258号
30	谷田長助	「其方被官」小林孫兵衛 「其方被官」樋口忠次郎	被疵 被疵	×	C	福岡県史－下、1332号

※上表におけるNo.は表1におけるNo.に対応している。

※上表の宛所について、『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期(下)（財団法人西日本文化協会、1988年、622～690頁）の人名索引により実名が判明する者は（ ）内に記した。

※上表の宛所について、丹半左衛門尉の実名は、中野等・穴井綾香『近世大名立花家』〈柳川の歴史4〉（柳川市、2012年、181頁）によった。

【書止文言の凡例】

A…恐々謹言

B…謹言

C…～候也

D…～者也

【出典の凡例】

柳川市史－前編…『柳川市史』史料編V、近世文書（前編）（柳川市、2011年）

柳川市史-後編…『柳川市史』史料編Ⅴ、近世文書(後編)(柳川市、2012年)

福岡県史-上…『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期(上)(財団法人西日本文化協会、1986年)

福岡県史-下…『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期(下)(財団法人西日本文化協会、1988年)

柳河藩-下…『柳河藩享保八年藩士系図・下』(柳川歴史資料集成第二集)(柳川市、1997年)

(注1) 安東孫兵衛尉宛の大津城攻めの感状(前掲『柳川市史』史料編Ⅴ、近世文書(前稿)(645頁))の書止文言はA(恐々謹言)である。原文書の『柳川市史』史料編Ⅴ、近世文書(前編)(柳川市、2011年、645頁)は、書止文言がC(～候也)であるが、写しの文書である前掲『柳川市史』史料編Ⅴ、近世文書(前編)(18頁)、『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期(下)(財団法人西日本文化協会、1988年、1092号文書)は書止文言がA(恐々謹言)である。この点については、写しの文書を作成する際に書止文言を薄札の「～候也」から厚札の「恐々謹言」に書き換えた可能性が考えられる。

(注2) 『柳河藩享保八年藩士系図・下』(柳川歴史資料集成第二集)(柳川市、1997年、16頁)の許斐家の系図では「専之丞正雄」としている。

(注3) 問注所三右衛門尉宛の大津城攻めの感状(『柳川市史』史料編Ⅴ、近世文書(後編)、柳川市、2012年、263頁、前掲『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期(下)、1011号文書)の書止文言はA(恐々謹言)である。

(注4) 堀善右衛門宛(前掲『柳河藩享保八年藩士系図・下』、123頁)の感状(江上合戦)も同文である。前掲『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期(下)(676頁)の人名索引によれば、堀善右衛門と堀喜右衛門は同一人物である。

表3

江上合戦（慶長5年10月20日）についての立花宗茂発給の軍忠一見状

	発給年月日	発給者	宛所	原写	内容の摘要	出典
1	-	- (立花宗茂)	-	写	慶長5年10月20日の江上表での一戦の時、安東五郎右衛門の「与力・被官・中間」の戦死、或いは、被疵衆の着到を披見した ※戦死の衆5人、被疵衆14人（そのうち3人は中間か?）	柳川市史-前編 20頁
	-	- (立花宗茂)	-	写	慶長5年10月20日の江上表での一戦の時、安東五郎右衛門の「与力・被官・中間」の戦死、或いは、被疵衆の着到を披見した ※戦死の衆5人、被疵衆14人（そのうち3人は中間か?）	福岡県史-下 1094号
2	-	- (立花宗茂)	-	原	慶長5年10月20日の江上表での合戦の時、小野和泉守の「与力・被官・中間」の被疵、或いは、戦死の衆の着到に銘々披見を加えた ※被疵衆35人（そのうち1人は戦死）、戦死の衆27人	柳川市史-前編 102頁
	-	- (立花宗茂)	-	写	慶長5年10月20日の江上表での合戦の時、小野和泉守の「与力・被官・中間」の被疵、或いは、戦死の衆の着到に銘々披見を加えた ※被疵衆35人（そのうち1人は戦死）、戦死の衆27人	福岡県史-上 79号
3	-	- (立花宗茂)	-	原	慶長5年10月20日の江上表での一戦の時、立花吉右 <small>(マツ)</small> （左カ）門尉の「与力・被官・中間」の戦死、或いは、分捕、被疵の衆の着到を披見した ※分捕の衆13人（頸数は16 <small>(マツ)</small> （15カ））、被疵衆は18人、戦死の衆は7人	柳川市史-前編 233～234頁
	-	- (立花宗茂)	-	原	慶長5年10月20日の江上表での一戦の時、立花吉左衛門尉の「与力・被官・中間」の戦死、或いは、分捕、被疵の衆の着到を披見した ※分捕の衆13人（頸数は16 <small>(マツ)</small> （15カ））、被疵衆は18人、戦死の衆は7人	福岡県史-上 194号
4	-	- (立花宗茂)	-	写	慶長5年10月20日の江上表での合戦の時、立花新右衛門尉の「被官・中間」の戦死、或いは、被疵衆の着到を披見した ※被疵衆11人、戦死の衆6人	柳川市史-前編 322頁
	-	- (立花宗茂)	-	写	慶長5年10月20日の江上表での合戦の時、立花新右衛門の「被官・中間」の戦死、或いは、被疵衆の着到を披見した ※被疵衆11人、戦死の衆6人	福岡県史-下 563号
	-	- (立花宗茂)	-	原	慶長5年10月20日の江上表での合戦の時、立花新右衛門尉の「被官・中間」の戦死、或いは、被疵衆の着到を披見した ※被疵衆11人、戦死の衆6人	福岡市史-中世 996～997頁

5	-	- (立花宗茂)	-	原	慶長5年10月20日の江上表での一戦の時、十時撰津守の「与力・被官・中間」の被疵、或いは、戦死の衆の着到を披見した ※被疵衆5人、戦死の衆10人	柳川市史-前編 684頁
6	-	- (立花宗茂)	-	原	慶長5年10月20日の江上表での一戦の時、問注所三右衛門尉の「手之者数十人」の被疵、或いは、戦死の衆の銘々の着到を披見した ※被疵衆5人、戦死の衆5人	柳川市史-後編 263～264頁
	-	- (立花宗茂)	-	原	慶長5年10月20日の江上表での一戦の時、問注所三右衛門尉の「手之者数十人」の被疵、或いは、戦死の衆の銘々の着到を披見した ※被疵衆5人、戦死の衆5人	福岡県史-下 1012号
7	-	- (立花宗茂)	-	写	慶長5年10月20日の江上表での一戦の時、由布大炊助の「与力・被官」の被疵、或いは、戦死の衆の着到を披見した ※被疵衆2人、戦死の衆3人、鉄炮疵左の腰1人	柳川市史-後編 352～353頁
8	-	- (立花宗茂)	-	写	慶長5年10月20日の江上表での一戦の時、立花三太夫の「被官・中間」の被疵、或いは、戦死の衆の着到に銘々披見を加えた ※被疵衆11人 ※戦死の衆は記載漏れか？	柳川市史-後編 557頁
9	-	- (立花宗茂)	-	写	慶長5年10月20日の江上表での一戦の時、丹半左衛門尉の「被官・中間」の戦死、或いは、被疵の衆の着到を披見した ※被疵衆5人、戦死の衆2人	福岡県史-上 204号
10	-	- (立花宗茂)	-	写	慶長5年10月9日(20日カ)の江上表での一戦の時、齊藤左馬助の「被官・中間」の被疵、或いは、戦死の着到に銘々披見を加えた ※戦死の衆5人、被疵衆7人	福岡県史-上 211号
11	-	- (立花宗茂)	-	写	立花織部佐の「手之者」の戦死・疵(被疵カ)の者共の人数付 ※疵(被疵カ)の者21人、戦死の者4人	福岡県史-下 559号 ^(注1)
12	-	- (立花宗茂)	-	写	慶長5年10月20日の江上表での一戦の時、三池伊兵衛尉の「家中之者」の被疵、或いは、分捕の高名、戦死の衆の着到を銘々披見した ※被疵の衆12人、戦死の衆6人	福岡県史-下 983号
13	-	- (立花宗茂)	-	原	慶長5年10月20日の江上表での一戦の時、吉弘伝次の「手之者」の被疵、或いは、戦死の衆の着到を披見した ※被疵の衆9人、戦死の衆2人	福岡県史-下 1052号

※軍忠一見状の記載内容において、被疵、戦死等について個人名が記されていても、上表では人数に置き換えて表記した。

【出典の凡例】

柳川市史-前編…『柳川市史』史料編Ⅴ、近世文書(前編)(柳川市、2011年)

柳川市史-後編…『柳川市史』史料編Ⅴ、近世文書(後編)(柳川市、2012年)

福岡県史-上…『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期(上)(財団法人西日本文化協会、1986年)

福岡県史-下…『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期(下)(財団法人西日本文化協会、1988年)

福岡市史-中世…『新修福岡市史』資料編、中世2(福岡市、2014年)

(注1) この文書は写しであるため、「慶長五年十月廿日、於江上表一戦之刻」という本文の冒頭の文言が脱落している。

表4

江上合戦（慶長5年10月20日）についての立花宗茂発給の軍忠一見状における被疵・戦死等の記載に関する表

	名 前	状 況	出 典
1	安東五郎右衛門の「与力・被官・中間」	被疵・戦死	柳川市史－前編20頁
	■戦死の衆		
	安東新左衛門	戦死	
	石井四郎左衛門	戦死	
	後藤右衛門	戦死	
	江崎市郎	戦死	
	江崎又太郎	戦死	
	■被疵衆		
	安東太右衛門	被疵	
	海老名弾右衛門	被疵	
	黒木古左衛門	被疵	
	吉開太郎右衛門	被疵	
	江嶋善兵衛	被疵	
	中村与右衛門	被疵	
	江嶋孫六	被疵	
	富重長右衛門	被疵	
	近藤三介	被疵	
	江嶋善九郎	被疵	
	今村六内	被疵	
	善四郎（中間カ）	被疵	
	吉六（中間カ）	被疵	
	弥左衛門（中間カ）	被疵	
2	小野和泉守の「与力・被官・中間」	被疵・戦死	柳川市史－前編102～103頁
	■被疵衆		
	平山小左衛門尉	被疵…鉄炮疵	
	立山喜介	被疵…鉄炮疵	
	下城又左衛門尉	被疵…鉄炮疵	
	渋田与右衛門尉	被疵…鉄炮疵	
	寶珠山主計允	被疵…鉄炮疵	
	内野次郎右衛門尉	被疵…鉄炮疵	
	松隈小源	被疵…鉄炮疵	
	江嶋彦右衛門尉	被疵…鉄炮疵	
	綾部平蔵	被疵…鎧疵	
	大庭吉兵衛	被疵…刀疵	
	堤又左衛門尉	被疵…鎧疵	
	泊善兵衛	被疵…鉄炮疵	
	高山長五	被疵…鉄炮疵	

高山太郎左衛門尉	被疵…鉄炮疵	
岡本与介	被疵…鉄炮疵	
今村竹介	被疵…鉄炮疵	
古賀茂兵衛	被疵…鉄炮疵	
矢賀部武三	被疵…鉄炮疵	
青柳小二郎	被疵…鉄炮疵	
疋田七兵衛	被疵…鉄炮疵	
足達九兵衛	被疵…鉄炮疵	
牛嶋久作	被疵…鉄炮疵	
市右衛門 (中間カ)	被疵…鉄炮疵	
助七郎 (中間カ)	被疵…刀疵	
久介 (中間カ)	被疵…鉄炮疵	
源次郎 (中間カ)	被疵…鉄炮疵	
喜蔵 (中間カ)	被疵…鎧疵	
勘六 (中間カ)	被疵…鉄炮疵	
助右衛門 (中間カ)	被疵…鎧疵	
甚左衛門 (中間カ)	被疵…鎧疵	
三郎〔井手口五郎兵衛内〕(中間カ)	被疵…鎧疵	
七郎左衛門〔井手口五郎兵衛内〕(中間カ)	被疵…鉄炮疵	
被官一人〔下城又左衛門内〕	戦死 ^(注1)	
被官一人〔新溝莊屋内〕	被疵…鎧疵	
被官一人〔大庭吉兵衛内〕	被疵…刀疵	
■戦死の衆		
小野治部左衛門尉	戦死	
井手口五郎兵衛尉	戦死	
綾部七郎兵衛尉	戦死	
丹波左馬助	戦死	
丹波左馬助の被官一人	戦死	
黒木勘七	戦死	
鍋山紀伊守	戦死	
柴田善右衛門尉	戦死	
柴田善右衛門尉の被官一人	戦死	
谷川三郎兵衛尉	戦死	
大原市内	戦死	
井口惣右衛門尉	戦死	
甲斐二左衛門尉	戦死	
上村長左衛門尉	戦死	
松木与四右衛門尉	戦死	
馬場八郎	戦死	
恵良勝吉	戦死	

中牟田藤七	戦死	
半田又兵衛尉	戦死	
戸次藤左衛門尉	戦死	
上妻喜介	戦死	
宗鮮（中間カ）	戦死	
大六（中間カ）	戦死	
専介（中間カ）	戦死	
喜三郎（中間カ）	戦死	
六郎（中間カ）	戦死	
六郎兵衛（中間カ）	戦死	
3 立花吉右 <small>(ママ)</small> （左カ）衛門尉の「与力・被官・中間」	戦死・分捕・被疵	柳川市史 - 前編233 ~ 234頁
■分捕の衆		
後藤久内	分捕（討捕之）…頸1	
大山小平次	分捕（討捕之）…頸1	
安部半内	分捕（討捕之）…頸1	
寒田半右衛門尉	分捕（討捕之）…頸1	
大塚九右衛門尉	分捕（討捕之）…頸1	
真鍋十介	分捕（討捕之）…頸2	
清水作允	分捕（討捕之）…頸2	
原六内	分捕（討捕之）…頸1	
安部外記	分捕（討捕之）…頸1	
喜介（中間カ）	分捕（討捕之）…頸1	
源四郎（中間カ）	分捕（討捕之）…頸1	
善三郎（中間カ）	分捕（討捕之）…頸1	
甚三郎（中間カ）	分捕（討捕之）…頸1	
	以上合計頸数 <small>(ママ)</small> 16（15カ）	
■被疵衆		
金生覚右衛門尉	被疵…鉄炮疵	
真鍋九兵衛	被疵…鉄炮疵	
庄司清介	被疵…鉄炮疵	
竹原勝五郎	被疵…鉄炮疵	
河崎勝介	被疵…鉄炮疵	
安河内三介	被疵…刀疵	
大神久右衛門尉	被疵…刀疵	
甲斐勘介	被疵…鉄炮疵	
国武空右衛門尉	被疵…刀疵	
小野久作	被疵…鉄炮疵	
篠原喜介	被疵…刀疵	
水上安右衛門尉	被疵…刀疵	
甚左衛門尉（中間カ）	被疵…鎧疵	

	喜介 (中間カ)	被疵…鉄炮疵	
	五郎左衛門尉 (中間カ)	被疵…鉄炮疵	
	源三郎 (中間カ)	被疵…鉄炮疵	
	孫兵衛 (中間カ)	被疵…鉄炮疵	
	三八郎 (中間カ)	被疵…鉄炮疵	
	■戦死の衆		
	狩野助右衛門尉	戦死	
	三坂宮内	戦死	
	村田四兵衛	戦死	
	大塚伊右衛門尉	戦死	
	大塚与七郎	戦死	
	大神諸右衛門	戦死	
	八並六右衛門	戦死	
4	立花新右衛門尉の「被官・中間」	戦死・被疵	柳川市史 - 前編322頁
	■被疵衆		
	赤川平藏	被疵	
	西市作	被疵	
	中伊左衛門	被疵	
	境孫左衛門	被疵	
	吉村喜右衛門	被疵	
	高村五郎右衛門	被疵	
	助六 (中間カ)	被疵	
	六郎 (中間カ)	被疵	
	孫四郎 (中間カ)	被疵	
	神介 (中間カ)	被疵	
	孫十郎 (中間カ)	被疵	
	■戦死の衆		
	松尾加右衛門	戦死	
	松尾市内	戦死	
	境三右衛門	戦死	
	市郎 (中間カ)	戦死	
	九郎左衛門 (中間カ)	戦死	
	満五郎 (中間カ)	戦死	
5	十時撰津守の「与力・被官・中間」	被疵・戦死	柳川市史 - 前編684頁
	■被疵衆		
	下川甚兵衛尉	被疵	
	松岡平右衛門尉	被疵	
	茂作 (中間カ)	被疵	
	与三左衛門 (中間カ)	被疵	
	久内 (中間カ)	被疵	

■戦死の衆			
	衛藤久七	戦死	
	平岡左馬允	戦死	
	三原勝介	戦死	
	久又左衛門尉	戦死	
	吉開孫七	戦死	
	江上甚内	戦死	
	江上孫次郎	戦死	
	傳次（中間カ）	戦死	
	又兵衛尉（中間カ）	戦死	
	今若（中間カ）	戦死	
6	問注所三右衛門尉の「手之者数十人」	被疵・戦死	柳川市史－後編263頁
■被疵衆			
	尾崎六介	被疵	柳川市史－後編263～264頁
	池田九郎	被疵	
	善七郎（中間カ）	被疵	
	忠三郎（中間カ）	被疵	
	又三郎（中間カ）	被疵	
■戦死の衆			
	町野三郎右衛門入道	戦死	
	町野三郎左衛門尉	戦死	
	町野善兵衛尉	戦死	
	石井藤右衛門尉	戦死	
	近藤孫次郎	戦死	
7	由布大炊助の「与力・被官」	被疵・戦死	柳川市史－後編352～353頁
■被疵衆			
	宇美助左衛門	被疵	
	宇美惣左衛門	被疵	
■戦死衆			
	横田市右衛門	戦死	
	原田六助	戦死	
	倉原源助	戦死	
	－（「被疵衆」脱カ）		
	八若（中間カ）	鉄炮疵左の腰	
8	立花三太夫の「被官・中間」	被疵・戦死	柳川市史－後編557頁
■被疵衆			
	山邊清蔵	被疵	
	牟田口三介	被疵	
	寺野小七	被疵	
	與次郎（中間カ）	被疵	

	久助 (中間カ)	被疵	
	孫三郎 (中間カ)	被疵	
	永野武吉	被疵	
	富安又三郎	被疵	
	江崎太郎兵衛	被疵	
	松枝九郎右衛門	被疵	
	九郎 (中間カ)	被疵	
	(「戦死之衆」以下、脱カ)		
9	丹半左衛門尉の「被官・中間」	戦死・被疵	福岡県史 - 上、204号
	■被疵衆		
	水上小右衛門	被疵…鉄炮疵	
	高尾小兵衛	被疵…鉄炮疵	
	篠崎惣右衛門	被疵…刀疵	
	松吉茂作	被疵…鉄炮疵	
	市次郎 (中間カ)	被疵…鉄炮疵	
	■戦死の衆		
	山仲喜左衛門	戦死	
	神五郎 (中間カ)	戦死	
10	斉藤左馬助の「被官・中間」	被疵・戦死	福岡県史 - 上、211号
	■戦死の衆		
	斉藤平左衛門	戦死	
	尾田善七	戦死	
	広瀬助右衛門	戦死	
	安部仁左衛門	戦死	
	甚介 (中間カ)	戦死	
	■被疵衆		
	惣左衛門 (中間カ)	被疵	
	忠二郎 (中間カ)	被疵	
	與吉郎 (中間カ)	被疵	
	仁三郎 (中間カ)	被疵	
	市助 (中間カ)	被疵	
	喜介 (中間カ)	被疵	
	伊助 (中間カ)	被疵	
11	立花織部佐の「手之者」	戦死・疵 (被疵カ)	福岡県史 - 下、559号
	■疵 (被疵カ) の者 (衆カ)		
	久保六右衛門	疵…鉄炮疵	
	真玉七兵衛	疵…鉄炮疵	
	木下大膳之丞	疵…鉄炮疵	
	末村監物允	疵…鎗疵	
	小左井平左衛門	疵…鎗疵	

大田與右衛門	疵…鎗疵	
川口作内	疵…鎗疵	
堤與四右衛門	疵…鎗疵	
竹山新三郎	疵…鎗疵	
入江次兵衛	疵…矢疵	
木下九右衛門	疵…矢疵	
佐藤六内	疵…矢疵	
中嶋太郎右衛門	疵…矢疵	
藤三郎（中間カ）	疵…鉄炮疵	
惣次郎（中間カ）	疵…鎗疵	
弥十郎（中間カ）	疵…鎗疵	
平次郎（中間カ）	疵…鎗疵	
善九郎（中間カ）	疵…鎗疵	
三吉（中間カ）	疵…矢疵	
作介（中間カ）	疵…矢疵	
神介（中間カ）	疵…矢疵	
■戦死の者 ^(ママ) （衆カ）		
井手太郎兵衛	戦死	
井手市兵衛	戦死	
山崎九兵衛	戦死	
下川源之丞	戦死	
12 三池伊兵衛尉の「家中之者」	被疵・分捕高名・戦死	福岡県史 - 下、983号
■ - 「分捕之衆」脱カ）		
三池太郎兵衛	分捕	
■ - 「被疵衆」脱カ）		
大塚縫殿助	（被疵）…矢疵	
本郷伊介	（被疵）…鉄炮疵	
北助右衛門尉	（被疵）…矢疵	
徳永惣右衛門尉	（被疵）…鉄炮疵	
徳永又兵衛尉	（被疵）…鉄炮疵	
松木勘内	（被疵）…鉄炮疵	
天野喜内	（被疵）…矢疵	
中原早吉	（被疵）…矢疵	
水谷孫右衛門尉	（被疵）…矢疵	
正市允	（被疵）…矢疵	
助六（中間カ）	（被疵）…鉄砲 ^(ママ) （砲カ）疵	
■戦死の衆		
三池太郎助	戦死	
黒田喜三次	戦死	
徳永七兵衛尉	戦死	

	増田九五郎	戦死	
	亀崎与吉	戦死	
	甚九郎 (中間カ)	戦死	
13	吉弘伝次の「手之者」	被疵・戦死	福岡県史-下、1052号
	■被疵衆		
	吉弘内蔵右衛門尉	被疵	
	綾部九介	被疵	
	都甲又左衛門尉	被疵	
	舌間与介	被疵	
	都甲八右衛門尉	被疵	
	瀬口藤左衛門尉	被疵	
	渡辺龍右衛門尉	被疵	
	大藪三七	被疵	
	三四郎 (中間カ)	被疵	
	■戦死の衆		
	古賀弥十郎	戦死	
	庄司船右衛門尉	戦死	

※上表におけるNo.は表3におけるNo.に対応している。

【出典の凡例】

柳川市史-前編…『柳川市史』史料編V、近世文書(前編)(柳川市、2011年)

柳川市史-後編…『柳川市史』史料編V、近世文書(後編)(柳川市、2012年)

福岡県史-上…『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期(上)(財団法人西日本文化協会、1986年)

福岡県史-下…『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期(下)(財団法人西日本文化協会、1988年)

(注1) 被官一人〔下城又左衛門内〕は「戦死」と記されているが、「被疵衆」に入っている。よって、本来は「戦死之衆」に入れるべきである。

表5

No.	感状の宛所	石高	与力の人数	江上合戦の感状の着到文言の有無	大津城攻めの感状の着到文言の有無	江上合戦の感状の書止文言	大津城攻めの感状の書止文言
1	安東彦右衛門尉	1000石	7人	×	×	C	A
2	安東孫兵衛尉	1000石	4人	×	×	C	A
3	安東二左衛門尉	不明		○	感状なし	C	感状なし
4	小野和泉守	5000石	52人	○	感状なし	A	感状なし
5	小野源左衛門尉	150石		×	感状なし	B	感状なし
6	立花吉左衛門尉	4000石	42人	○	○	A	A
7	立花三河入道	不明		○	感状なし	A	感状なし
8	佐田清兵衛尉	不明		×	感状なし	B	感状なし
9	佐田清兵衛尉	不明		×	感状なし	B	感状なし
10	立花新右衛門尉	1000石		○	×	A	A
11	十時摂津守	1300石	18人	○	感状なし	A	感状なし
12	許斐藤兵衛	不明		×	感状なし	C	感状なし
13	間注所三右衛門尉	不明		○	×	D	A
14	由布大炊助	700石	8人	○	×	D	A
15	吉弘伝次	不明		○	感状なし	A	感状なし
16	立花乙壽	不明		○	感状なし	A	感状なし
17	立花助兵衛	300石		○	×	A	A
18	十時平介	不明		×	感状なし	B	感状なし
19	丹半左衛門尉	1000石		○	×	A	A
20	斉藤左馬助	不明		○	感状なし	A	感状なし
21	長伊勢王	不明		×	感状なし	D	感状なし
22	安東作介（作之介）	※安東彦右衛門の与力の一人		×	×	D	×
23	立花織部佐	3500石		○	○	A	A
24	福有次介	150石		×	感状なし	B	感状なし
25	堀喜右衛門 ^(注1)	※堀又介の与力の一人		×	感状なし	C	感状なし
26	堀喜四郎	不明		×	感状なし	C	感状なし
27	三池伊兵衛尉	2150石、或いは2300石		○	○	A	A
28	安部宗左衛門	不明		×	感状なし	D	感状なし
29	東郷太郎兵衛	不明		×	感状なし	C	感状なし
30	谷田長助	不明		×	感状なし	C	感状なし

※上表におけるNo.は表1、表2におけるNo.に対応している。

※上表における石高、及び、与力の人数、については、「与力附侍帳」、「文禄五年朝鮮御陣御家中軍役高付騎馬并鉄鉈付之覚」^(ママ)、「慶長五年侍帳」(『柳河藩立花家分限帳』(柳川歴史資料集第三集)、柳川市、1998年)によった。

【書止文言についての凡例】

A…恐々謹言

B…謹言

C…～候也

D…～者也

×…書止文言なし

(注1)『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期(下)(財団法人西日本文化協会、1988年、676頁)の人名索引によれば、堀喜右衛門と堀善右衛門は同一人物である。

表 6
軍忠一見状 (江上合戦) の内訳人数

No.	分 捕	被 疵	戦 死	合 計
1	記載なし	14人 (そのうち中間は3人)	5人	19人 (そのうち中間は3人)
2	記載なし	34人 (そのうち中間は10人)	28人 (そのうち中間は6人)	62人 (そのうち中間は16人)
3	13人 (そのうち中間は4人)	18人 (そのうち中間は6人)	7人	38人 (そのうち中間は10人)
4	記載なし	11人 (そのうち中間は5人)	6人 (そのうち中間は3人)	17人 (そのうち中間は8人)
5	記載なし	5人 (そのうち中間は3人)	10人 (そのうち中間は3人)	15人 (そのうち中間は6人)
6	記載なし	5人 (そのうち中間は3人)	5人	10人 (そのうち中間は3人)
7	記載なし	3人 (そのうち中間は1人)	3人	6人 (そのうち中間は1人)
8	記載なし	11人 (そのうち中間は4人)	記載なし (戦死者の名前の記載脱カ)	11人 (そのうち中間は4人)
9	記載なし	5人 (そのうち中間は1人)	2人 (そのうち中間は1人)	7人 (そのうち中間は2人)
10	記載なし	7人 (そのうち中間は7人)	5人 (そのうち中間は1人)	12人 (そのうち中間は8人)
11	記載なし	21人 (そのうち中間は8人)	4人	25人 (そのうち中間は8人)
12	1人	11人 (そのうち中間は1人)	6人 (そのうち中間は1人)	18人 (そのうち中間は2人)
13	記載なし	9人 (そのうち中間は1人)	2人	11人 (そのうち中間は1人)
合 計	14人 〔5.6%〕 ^(注1) (そのうち中間は4人)	154人 〔61.4%〕 ^(注2) (そのうち中間は53人)	83人 〔33.1%〕 ^(注3) (そのうち中間は15人)	251人 〔100%〕 (そのうち中間は72人)

251人
(そのうち中間は72人)

※上表におけるNo.は表3、表4におけるNo.に対応している。

【番号の凡例】

- 1 安東五郎右衛門の「与力・被官・中間」
- 2 小野和泉守の「与力・被官・中間」
- 3 立花吉右(左カ)衛門尉の「与力・被官・中間」
- 4 立花新右衛門尉の「被官・中間」
- 5 十時撰津守の「与力・被官・中間」
- 6 間注所三右衛門尉の「手之者数十人」
- 7 由布大炊助の「与力・被官」
- 8 立花三太夫の「被官・中間」
- 9 丹半左衛門尉の「被官・中間」

- 10 齊藤左馬助の「被官・中間」
- 11 立花織部佐の「手之者」
- 12 三池伊兵衛尉の「家中之者」
- 13 吉弘伝次の「手之者」

（注1）%の提示については、小数点第二位を四捨五入した。

（注2）%の提示については、小数点第二位を四捨五入した。

（注3）%の提示については、小数点第二位を四捨五入した。

表 7
軍忠一見状 (江上合戦) における被疵の内訳

No.	被疵の人数	被疵の内訳			
		鉄炮疵	鎗 疵	刀 疵	矢 疵
2	小野和泉守の「与力・被官・中間」				
	被疵 34 人 (100%)	鉄炮疵 24 人 (70.6%)	鎗疵 7 人 (20.6%)	刀疵 3 人 (8.8%)	
3	立花吉右 ^(ママ) (左カ) 衛門尉の「与力・被官・中間」				
	被疵 18 人 (100%)	鉄炮疵 12 人 (66.7%)	鎗疵 1 人 (5.6%)	刀疵 5 人 (27.8%)	
9	丹半左衛門尉の「被官・中間」				
	被疵 5 人 (100%)	鉄炮疵 4 人 (80%)		刀疵 1 人 (20%)	
11	立花織部佐の「手之者」				
	被疵 21 人 (100%)	鉄炮疵 4 人 (19.0%)	鎗疵 10 人 (47.6%)		矢疵 7 人 (33.3%)
12	三池伊兵衛尉の「家中之者」				
	被疵 11 人 (100%)	鉄炮疵 5 人 (45.5%)			矢疵 6 人 (54.5%)
合計	被疵 89 人 (100%)	鉄炮疵 49 人 (55.1%)	鎗疵 18 人 (20.2%)	刀疵 9 人 (10.1%)	矢疵 13 人 (14.6%)

※上表におけるNo.は表3、表4、表6におけるNo.に対応している。

※上表における%の表示は、小数点第二位を四捨五入した。

表8

名 前	感状 (大津城攻め)	軍忠一見状 (大津城攻め)	感状 (江上合戦)	軍忠一見状 (江上合戦)
内田壱岐入道（鎮家）	○ ^(注1)			
立花吉左衛門尉（成家）	○	○	○	○
安東彦右衛門尉（常久）	○		○	
安東孫兵衛尉（連州）	○		○	
上妻次兵衛尉	○			
内田清右衛門尉（玄利）	○			
高野四郎左衛門尉	○			
立花新右衛門尉（親勝）	○		○ ^(注2)	○
立花善次郎（親雄）	○			
十時主計允（成重）	○			
由布孫左衛門尉（惟可）	○			
由布玄蕃頭（惟与）	○	○		
由布大炊助（惟貞）	○		○	○
宇美助左衛門（房之）	○			
吉田半右衛門尉	○			
立花三太夫 ^(注3) （統次）	○			○
立花助兵衛	○		○	
石田六允（俊重）	○			
大石彦兵衛（成美）	○			
野上忠右衛門（茂正）	○			
安東作介〔作之介〕	○		○	
丹半左衛門尉（親次）	○		○	○
三池伊兵衛尉（親家）	○	○	○	○
田尻甚兵衛	○			
間注所三右衛門尉（政連）	○		○	○
安部半内	○			
安東二左衛門尉			○ ^(注4)	
小野和泉守（鎮幸）			○	○
小野源左衛門尉（正利）			○	
立花三河入道（賢賀）			○	
佐田清兵衛尉（統春）			○ ^(注5)	
十時撰津守（連貞）			○	○
許斐藤兵衛			○ ^(注6)	
吉弘伝次（政宣）			○	○
立花乙壽			○ ^(注7)	
十時平介（惟久）			○	
齊藤左馬助（統安）			○	○

名 前	感状 (大津城攻め)	軍忠一見状 (大津城攻め)	感状 (江上合戦)	軍忠一見状 (江上合戦)
立花織部佐 (親家)	○	○	○	○
福有次介 (直親)			○	
堀喜右衛門 (安)			○ ^(注8)	
堀喜四郎 (貞治)			○ ^(注9)	
安部宗左衛門			○	
東郷太郎兵衛			○	
谷田長助			○	
安東五郎右衛門 ^(注10)				○
長伊勢王 (喬祐)			○ ^(注11)	

※上表は、拙稿「慶長5年9月13日の大津城攻めについての立花宗茂発給の感状と軍忠一見状（合戦手負注文）に関する考察（その2）」（『史学論叢』47号、別府大学史学研究会、2017年）の表1、表3と、拙稿「慶長5年10月20日の江上合戦についての立花宗茂発給の感状と軍忠一見状（合戦手負注文）に関する考察（その2）」（『史学論叢』47号、別府大学史学研究会、2017年）の表1、表3をもとに作成した。

※上表の名前について、『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期（下）（財団法人西日本文化協会、1988年、622～690頁）の人名索引により実名が判明する者は（ ）内に記した。

※上表の名前について、由布玄蕃頭の実名は、中野等・穴井綾香『近世大名立花家』〈柳川の歴史4〉（柳川市、2012年、162頁）によった。

※上表の名前について、丹半左衛門尉の実名は、前掲・中野等・穴井綾香『近世大名立花家』（181頁）によった。

（注1）子息・（内田）監物が戦死した。

（注2）親父・（立花）了均と（立花）善次郎が戦死した。

（注3）立花三太夫は江上合戦で戦死した。そのため、江上合戦の感状は子の立花乙壽に対して出された（後掲注（7）参照）。立花三太夫は江上合戦で戦死したが、立花三太夫の「被官・中間」（被庇・戦死）については立花宗茂が軍忠一見状（江上合戦）を出している点には注意したい（表3、表4参照）。

（注4）叔父・（安東）五郎右衛門尉が戦死した。

（注5）親父・（佐田）平右衛門尉が戦死した。

（注6）父・（許斐）専允が戦死した。

（注7）父・（立花）三太夫が戦死した。そのため、江上合戦の感状は子の立花乙壽に対して出された。

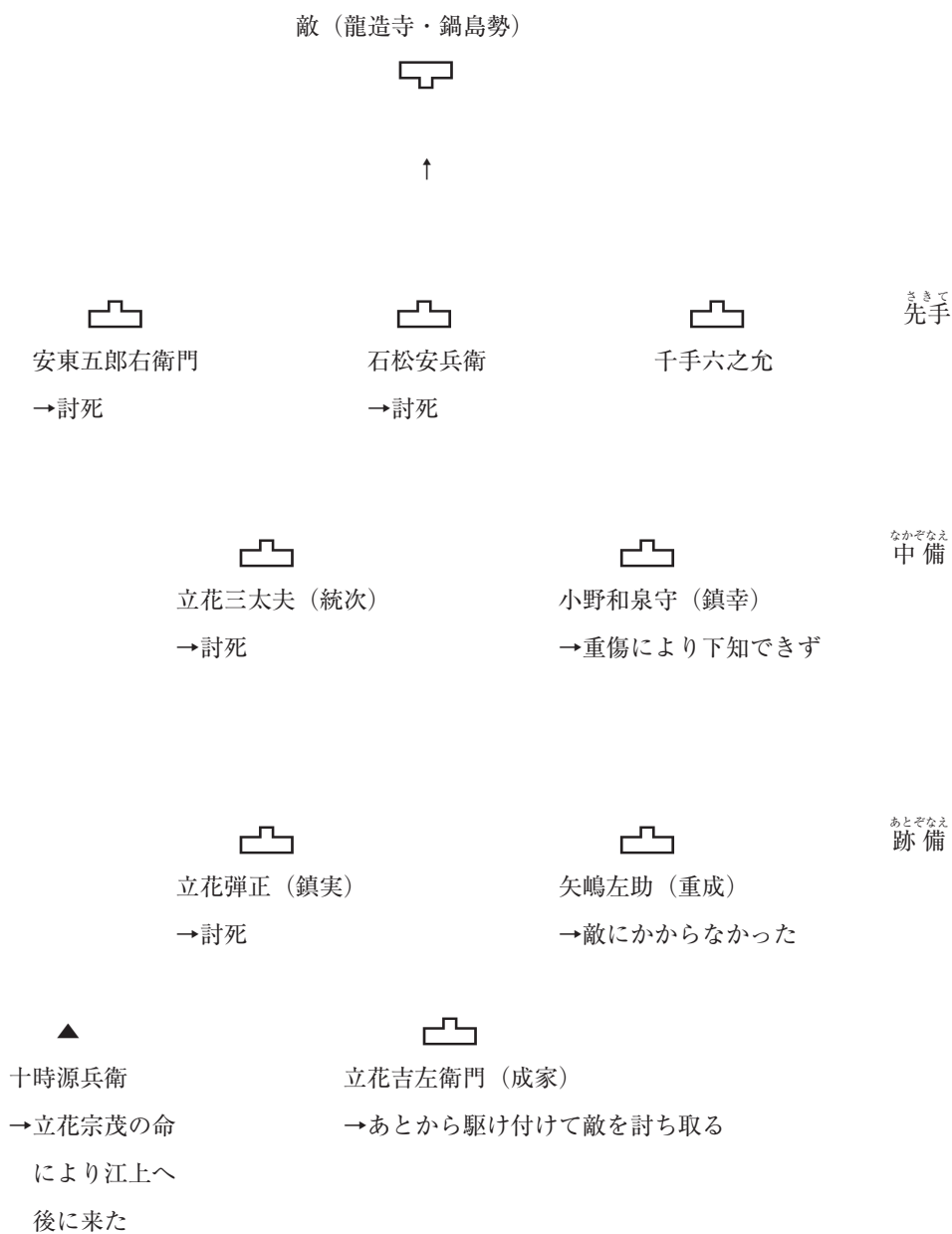
（注8）堀善右衛門宛（『柳河藩享保八年藩士系図・下』〈柳川歴史資料集成第二集〉、柳川市、1997年、123頁）の感状（江上合戦）も同文である。『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期（下）（財団法人西日本文化協会、1988年、676頁）の人名索引によれば、堀善右衛門と堀喜右衛門は同一人物である。

（注9）父・（堀）勘解由允が戦死した。

（注10）安東五郎右衛門は江上合戦で戦死したが（前掲注（4）参照）、安東五郎右衛門の「与力・被官・中間」（被庇・戦死）については立花宗茂が軍忠一見状（江上合戦）を出している点には注意したい（表3、表4参照）。

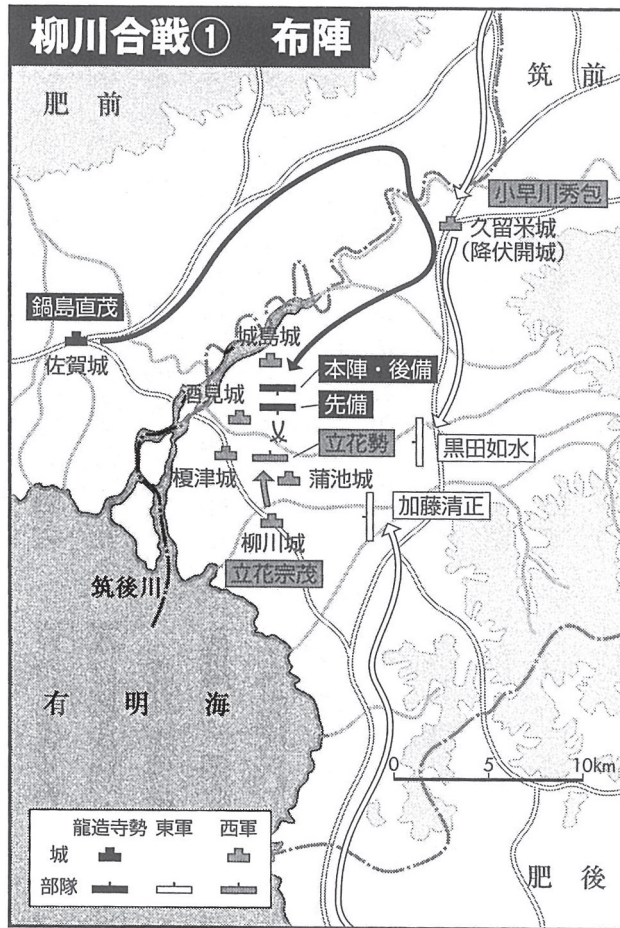
（注11）父・（長）大学允が戦死した。

図1
江上合戦における立花勢の布陣の概要図



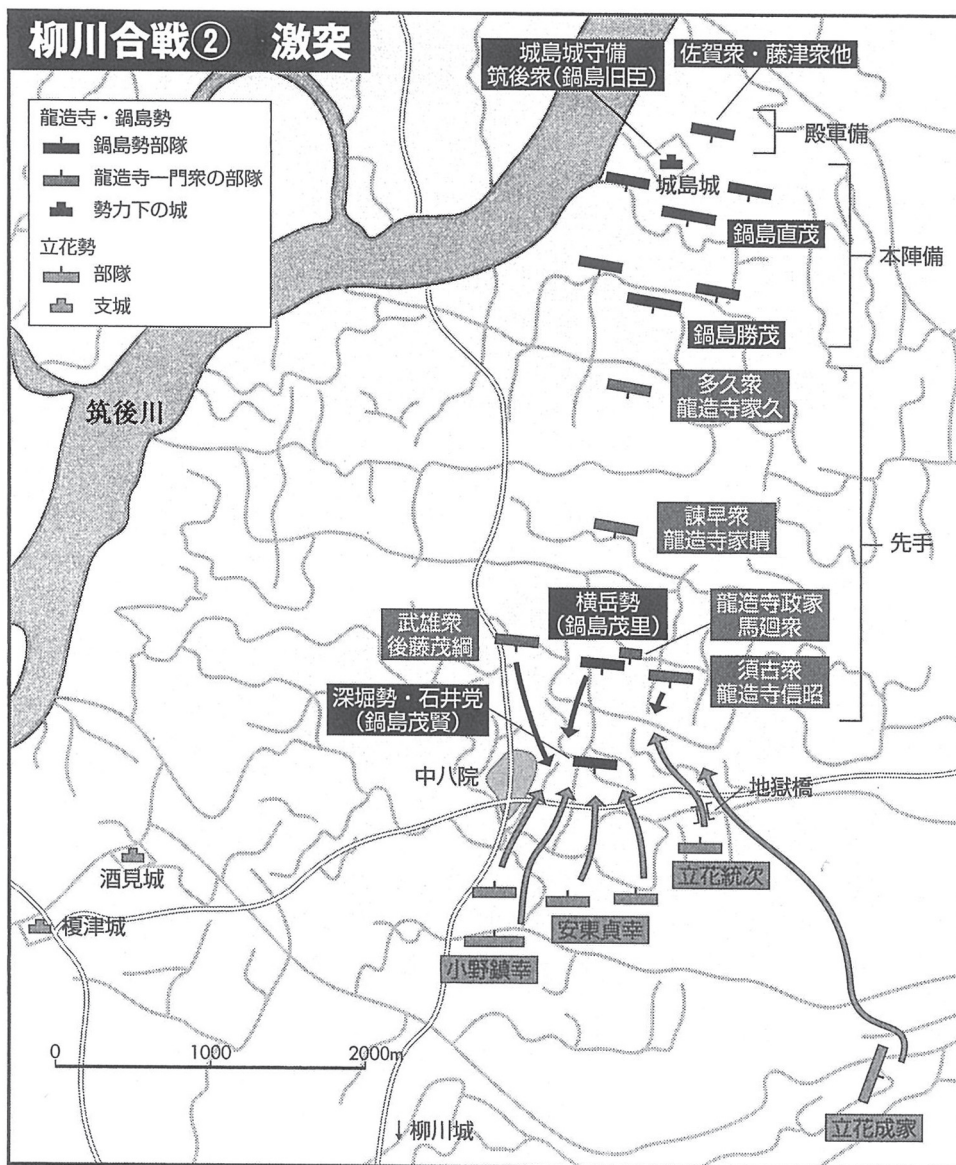
※図1は「於肥後国高瀬、小野和泉・立花吉左衛門・十時源兵衛、三人申分」（『福岡県史』近世史料編・柳川藩初期（上）、財団法人西日本文化協会、1986年、82号文書。『柳川市史』史料編V・近世文書（前編）、柳川市、2011年、132～134頁）の記載内容をもとに作成した。

図 2



中西豪「鍋島父子の関ヶ原－龍造寺領国、存続への試練」(『歴史群像』131号、学研パブリッシング、2015年)より引用。前掲・中西豪「鍋島父子の関ヶ原－龍造寺領国、存続への試練」では、江上合戦について柳川合戦という名称を使用している。前掲・中西豪「鍋島父子の関ヶ原－龍造寺領国、存続への試練」における図(「柳川合戦①布陣」、「柳川合戦②激突」)には中西氏による図のキャプションが記されているが、本稿での引用に際しては、そのキャプションは省略した。

図3



中西豪「鍋島父子の関ヶ原－龍造寺領国、存続への試練」（『歴史群像』131号、学研パブリッシング、2015年）より引用。前掲・中西豪「鍋島父子の関ヶ原－龍造寺領国、存続への試練」では、江上合戦について柳川合戦という名称を使用している。前掲・中西豪「鍋島父子の関ヶ原－龍造寺領国、存続への試練」における図（「柳川合戦①布陣」、「柳川合戦②激突」）には中西氏による図のキャプションが記されているが、本稿での引用に際しては、そのキャプションは省略した。